

# 清末小説から 141

2021.4.1

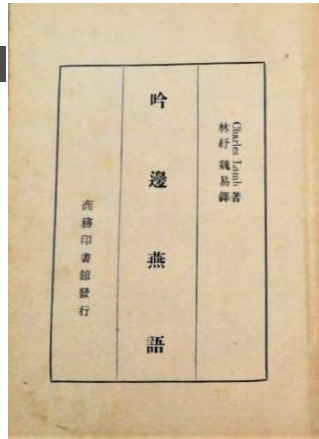
- いくたびかの阿英目録29……………樽本照雄 1
- 包天笑漢訳クレイ『空谷蘭』について——涙香訳『野の花』の原作……………神田一三 6
- 漢訳『乳姉妹』について(誤解の系譜4完)……………樽本照雄33
- 陀思妥耶夫斯基小説漢譯佚忘四種……………古 二 徳39
- 清末小説から38、42

★『清末民初小説目録 第13版』を公開しています。本研究会ウェブサイトからダウンロードすることができます(無料)。樽本『清末小説四談』を公開準備中。清末小説研究会住所が新し

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方

## いくたびかの阿英目録29

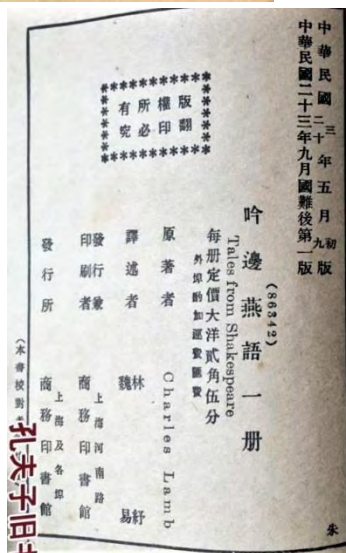
樽 本 照 雄



## 別の動きが生じる——ラム名の表記

「莎士比」表記を証拠として林訳批判は継続されている。ところが出版界では1930年代になって別の動きが出現した。『吟邊燕語』の版元である商務印書館の刊行物にその変化が見える。

孔夫子旧书网所収の写真を示す。



『吟邊燕語』だから林訳に間違いはない。その扉には Charles Lamb 著と明記されている。

奥付にも原著者を Charles Lamb とする。さらに吟邊燕語に Tales from Shakespeare と添える。訳述者には当然ながら林紓と魏易の名前を併記する。刊年は中華民國三年五月初版／二十年五月九版、中華民國二十三年九月国難後第一版である。

奥付の初版は1914年5月になっている。ならば1914年からラム著と表記していたのだろうか。

だが商務印書館刊行物の奥付については注意を要する。刊年の表示をそのまま信用するのは危険だ。

くり返す。上の国難後第一版に見える初版表示は1914年5月である。ならば1914年版から Lamb (ラム) と記載していたのか。そう考えれば誤る。

もともと『吟邊燕語』の初版は光緒三十年(1904)七月だ。そこから表示が一致していない。この1914年5月は商務版「小本小説」に見える。ただし七版本(孔夫子旧書網に写真あり。1914年5月初版／1924年7月七版)だ。初版は1914年2月(架蔵)が正しい。

この「小本小説」では原著者は莎士比となっている。ゆえにラム著とするのは1934年の国難後第一版からだとなる。だいいち1914年の刊行物にラムとなっていればその4年後に提起される文学革命派による林紓批判は論理的に成立しない。

1934年国難後第一版の表記を見ても私の疑問は解消しない。『吟邊燕語』の原作がラムであれば文学革命派の林訳批判は通らないのは明らかだ。ラムの小説を漢訳すれば小説体になるのは当然だろうといつも思う。ところが1930年代にも過去の林紓を掘り起こして支持擁護する研究者はいない。誰ひとりとして立ち上がって発言しなかった。そこの分離を埋めることができないから理解上の消化が不十分だ。

疑問は疑問のままである。つまり『吟邊燕語』初版の作者名は蘭姆なのか莎士比なのか確認できないのだ。阿英目録だけ、あるいは『吟邊燕語』の後版だけを見て判断することは適切ではない。見るべき実物を入手できていないからだ。あとになってわかる。結局のところ阿英の記述が正しいのかどうかの問題に帰結する。

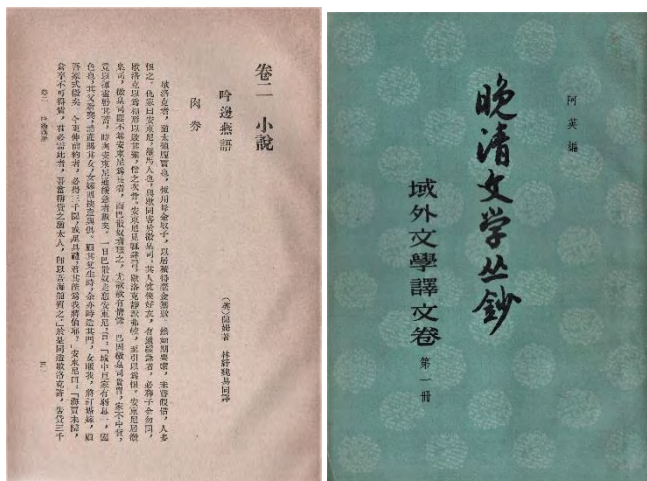
### その後の表記

その後刊行された叢書類に収録された該作品の著者表記を見る。

阿英編『晚清文学叢鈔・域外文学訳文巻』(北京・中華書局1961.9)所収では蘭姆著とある。



中華民國三年二月初版。小本小説



阿英編だから阿英目録と同じことになったと思われる。阿英は『吟辺燕語』に蘭姆著と記載されていることに自信を持っていたとわかる。まわりの研究者も蔵書家の阿英を信頼しきっていた。阿英が間違っているとは誰もいわない。彼と違う意見を提出した人はいないのだ。

1981年のことだ。林紓批判が続いているにもかかわらず出版界ではある小さな変化が起きた。商務印書館が林訳をまとめて再刊したのだ。といっても10種類でしかない。それと同時に馬泰来「林紓翻訳作品全目」(錢鍾書等著『林紓的翻譯』北京・商務印書館1981.1)が公表された。林訳の原作を多く明記して画期的な業績である。

その林訳小説叢書(北京・商務印書館1981.10)に収録された『吟辺燕語』もやはり蘭姆著とする。



馬泰来目録の番号059に『吟辺燕語』が説明される(71頁)。ラムの項目に配置し「莎士比原著」と書く。

莎氏作品に関連する林訳について馬泰来は慎重に区別している。上の示したように「Charles Lamb (1775-1834); Mary Lamb (1764-1847) 一種」と明示し底本がラムであることを確認している。

馬泰来は事実としてラム本を提示しその作者

表記が莎士比になっていることだけを記述した。詳しい説明はしていない。林訳批判についてはあえて記述を避けたように読める。「莎士比原著」とするのは間違いだと馬泰来が書けば状況は違ったかもしれない。説明はなくともラムの項目だから自然と理解できるという判断らしい。馬泰来は遠まわしに林紓の誤りを認めたことになろうか。

「雷差得紀」(1916)などの莎氏作品は別の箇所配置した。「(William Shakespeare, 1564-1616) 五種」(67頁)とカッコをつける。これは底本の確認がないことを意味する。説明して「実は莎劇をもとにした物語だ[実為莎士比亞戲劇本事]」とした。「本事」は「あらずじ」としてもいい。莎劇を小説化したという従来の説明を引き継いだ。

林紓らは莎氏原作の戯曲を小説化して漢訳した。馬泰来はそう説明せざるをえなかった。

私が気になったのはそこだ。林紓はラム本を漢訳して莎士比原著とした。なぜ『吟辺燕語』だけが特別なのか。それとは異なり「雷差得紀」などは莎劇から直接漢訳して小説にしたというのだ。同じ莎氏でも林紓たちが違う扱いにした理由がわからない。

ラム本を莎士比の名前で提出したのが『吟辺燕語』だ。ならば莎士比の名前を使っている「雷差得紀」なども同様の事情があるのではないか。小さな思いつきである。

1981年の段階では何もかも不明のままだった。何かおかしいという漠然とした気分が続く。意識の底で時に浮かびまた沈んだりする状態だ。長い時間の経過があった。小さな思いつきが現実に結論を得るまではるか後の2007年まで待たなくてはならなかった。

『吟辺燕語』について馬泰来は説明しなかった。そのことだけが残る。私のように無知な読者にしてみれば実物にラムとあるのか莎士比とあるのか判断できずに戸惑う。

『中国近代文学大系』11集28巻翻訳文学集

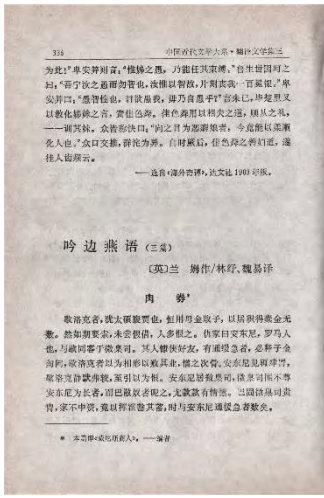
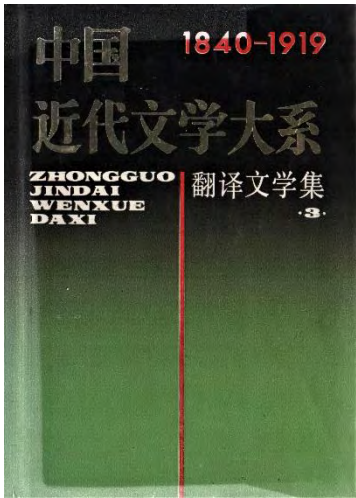
三(上海書店1991.4)も同様に蘭姆著として動かない。

かる。

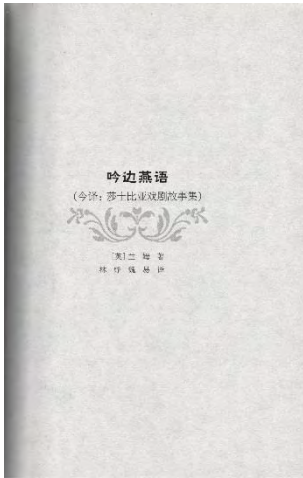
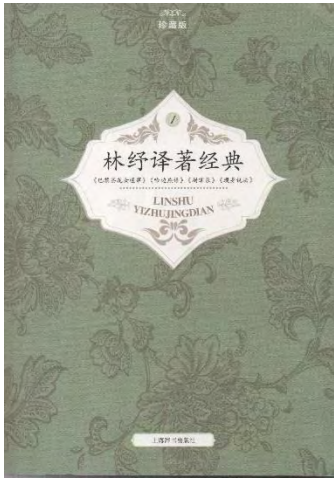
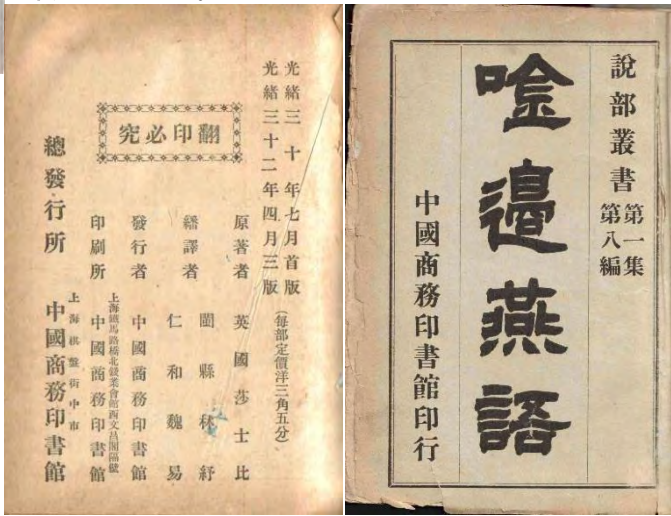
蘭姆著と表示してあるのであれば林紘批判の根拠が根底から失われてしまう。くり返すが現代文学史では林訳が原作者としたのは莎士比ということになっている。文学革命派の林紘批判は莎士比を根拠として出てきた。それとの矛盾があるということだ。

元版『吟辺燕語』の記述

私は「説部叢書」元版、すなわち第一集第八編(光緒三十年七月首版/光緒三十二年四月三版)を入手した。



のちの『林紘訳書經典』第1冊(上海世紀出版股份公司、上海辞書出版社 2013.1 珍藏版)も同じ蘭姆だ。



以上を総合する。馬泰来目録などを除いて阿英目録の「蘭姆著」は現在に至るまで各種書籍に引き継がれているということになる。ここには明らかに阿英目録の権威が持続している。その強力な影響力を否定することはできない。

この元版が私の林訳理解を決定的のものにしたのだ。

各叢書の編集者たちは『吟辺燕語』の表記を実物で確認しただろうか。彼らが初版を見て蘭姆と書いたと私は思わない。私は事実を把握して回顧しながら本文を書いているからそれがわ

本文と奥付には英国莎士比と記述されている。ここで大きな問題が露呈する。阿英目録にある「蘭姆著」はどこからきたのか。阿英は初版を手元において記述したのではないのか。実物を見ていながらありもしない蘭姆と書いた。そこに実在する莎士比はなぜ記録しなかったのか。一見阿英の「誤解」のように思える。阿英には何が起こっていたのか。

『吟辺燕語』1906年三版本は莎士比となっていることを確認する(孔夫子旧書網にある1905年再版本も同じ)。目録作成の原則からいってそれを蘭姆に置き換えることは許されない。莎

士比と記録することが最優先される。注としてならば蘭姆と書いてもいい。その原則を阿英は無視した。

林訳批判の根拠はラムではなく莎氏のみを出したという点だった。林紓批判を継承する阿英が「蘭姆」と記述するのはきわめて異例なことだ。

この問題を解決する手がかりになったのは阿英の論文に見える漢字8文字だった。

### 阿英の立論——林紓批判が先にある

阿英は『吟辺燕語』を解説して「誤原本為《沙氏筆記》」と書いた(阿英「翻訳史話」『小説四談』上海古籍出版社1981.12。244頁)。

1938年執筆だと文末にある。

文学革命派による林紓批判がはじまったのは銭玄同(筆名王敬軒)と劉半農による「なれあいの芝居[双簧戯]」(『新青年』第4巻第3号1918.3.15)からだ。

彼らは林訳『吟辺燕語』の原著者が莎士比となっているところをつかまえた。戯曲を小説にかけて漢訳したと批判した。「豆と麦の区別もつかない[不辨菽麦]」と慣用句を使用している。後の有名な「戯曲と小説の区別がつかない」という主張だ。

しかし銭玄同も劉半農もそれに続く胡適、鄭振鐸たち全員は『吟辺燕語』の底本がラム本だと知っていた。故意にわざと悪意をもって林紓に濡れ衣を着せたのである。彼らは林紓を批判することが正義だと信じていただろう。

阿英が『吟辺燕語』の原作者を蘭姆と記録したのは「誤解」「思い込み」から生じたものだと思う。誤解、思い込みにカッコをつけるのは阿英の意図的なものだと考えるからだ。単純な思い違いではない。複雑な背景を背負っている。

阿英の頭の中では林紓批判が定着していたのだ。『吟辺燕語』の原作がラム本であることを阿英も知っていた。だから阿英目録にも蘭姆と記入した。しかしそれでは林訳批判にならない。

1938年にまでさかのぼる。その時点で阿英は結論を示していた。

阿英は『吟辺燕語』について次のような説明をした。

至次年(一九〇四)七月、林紓、魏易合訳的《吟辺燕語》、才在商務出版。所依據的也是蘭姆本、惟篇数則已加到了二十、倍于《海[澗]外奇譚》。243頁

翌年(1904)七月になって林紓と魏易が合訳した『吟辺燕語』がようやく商務印書館から出版された。依拠したのもラム本であったがただ篇数は20に増やし『海[澗]外奇譚』の倍になった。

刊年について1904年七月と記述する。阿英は『吟辺燕語』の初版を見ていることがわかる。ところが初版にある莎士比を記述しない。取り出して明記したのがラム(蘭姆)なのだ。阿英は知っていた。

実物を手元におきながらそこに書かれた莎士比を無視する。そこには見えない蘭姆を示す。あまりに不思議だからくり返して書いてしまう。これは目録作成の原則から外れていると重ねていっておく。

文学革命派が林訳批判の根拠にしたのは莎劇を小説に変えて漢訳したことだ。莎士比原著という表記を証拠とした。ところが阿英が記述するようにラム本が底本であればそれが成立しない。ならばラムを知っておりそのラム名を出した阿英は林紓を擁護したか。文学革命派の批判を否定したのだろうか。それはない。あくまでも林紓批判の立場を保持し続けた。

そこで阿英は林紓批判を明確にするために彼なりに説明上の工夫をした。

阿英の説明は通常の論理を超える。無理やり林訳批判に結びつけたのだ。

まず林訳にある莎士比原著『英国詩人吟辺燕語』を前提にした。そのまま読めば莎氏が『シ

『シェイクスピア物語』を書いたことになる。知識人として普通に考えてそれはありえない理解だ。しかし阿英は解釈してそのありえないことを林紘の無知を証明する証拠とした。「(莎劇の)原本が『シェイクスピア物語』だと誤解していた[誤原本為《沙氏筆記》]」と阿英は解説したのである。ラム本が莎劇そのものだと林紘は誤解したという。戯曲と小説の区別がつかない論にそのまま直結する。林紘の無知を最大限に表示していると阿英は解釈して読者を誤誘導した。

莎氏が『シェイクスピア物語』を執筆したとは普通ではありえない思考だ。だがありえないからこそ林紘は無知だった、という結論に導きたい。これが阿英の考えであり林紘批判でもある。林序の記述を無視している。基本から成立しない。

そのラムが阿英目録作成時にも脳内に残留していた。『吟辺燕語』初版本を手元においていただろう。阿英はそこにある莎士比を見ながら原本にはない蘭姆を記述してしまったというわけ。

想像が飛躍しているかと思われるだろう。だがそう考えなければ実物にありもしない蘭姆が出てくるはずがない。 罍

## 包天笑漢訳クレイ『空谷蘭』について ——涙香訳『野の花』の原作

神 田 一 三

### はじめに

包天笑訳『空谷蘭』の原作に関連する論文はすでにいくつかが発表されている\*1。

包天笑が漢訳『空谷蘭』に使用した底本は黒岩涙香『野の花』でよい。またその原作はバーサ・M・クレイ『女の過ち』だという結論が出ている。

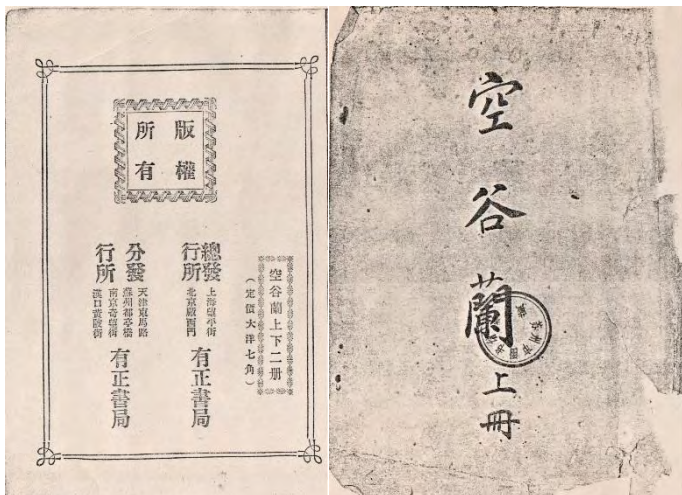
ただしそこにいたるまで紆余曲折があった。本稿ではあらためて問題を整理して経過の詳細を説明する。クレイ作品も日訳、漢訳とともに具体的に紹介したい。

最初にことわっておく。本稿は包天笑訳『空谷蘭』の演劇化、映画化は扱わない。ご了解いただきたい。

問題は2点ある。ひとつは『空谷蘭』単行本の刊行年が不明だ。該作の単行本奥付にはどういふわけか出版年月が記載されていない。そこから刊行年についての疑問が生じた。ふたつは英文原作者と作品の特定である。原作者として複数の人物が名前を出されていた。長い時間が流れたが特定するには至らなかったのだ。最終的にクレイの原作が指摘されたそのありさまを明らかにする。本稿末尾の「附録：『清末民初小説目録』各版に掲載された『空谷蘭』の英文原作」を見てもらえればおおよその経過がわかるだろう。

『空谷蘭』の新聞連載と刊年をめぐる——問題の所在 1

筆者が見ている『空谷蘭』の単行本(複写)は次のとおり。



下冊再版奥付(孔夫子旧書網)

以上の写真を見るかぎり本文は筆者所蔵の複写と同じである。

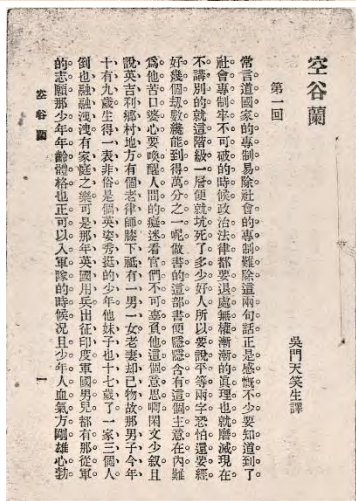
天笑生(包天笑)の名前で「訳」と表示する。ただし原作、原作者の記載はない。さらに上述のとおり刊年も明記されていない。これが疑問を発生させた。

先に『空谷蘭』の発表状況から見ていく。

以前とは研究環境が異なっている。陳大康著『中国近代小説編年史』全6冊(2014)\*2が刊行されたことを指す(編年史とは年表のこと)。それ以前に略称『編年』(2002)がある(後述)。これの規模を拡大した刊行物だ。『編年史』は『編年』とは異なり作品の実物を確認する努力をしているのがよい。しかも当時の新聞および広告記事を丹念に採録している。それにより作品の発表、単行本の刊行状況を比較的明確に把握することができるようになった。ここが従来とは違う点だ。翻訳成立の経過を探るにはその新聞連載と単行本の出版広告がひとつの参考になる。

本稿で扱う『空谷蘭』は新聞連載が先行した。署名は「笑」のみ。原作者、原作ともに示さない。「訳」もない。

まず『時報』連載状況を[編年④⑤]より引用する(数字は頁数)。



吳門天笑生訳『空谷蘭』上下冊 32回

上海北京・有正書局、奥付刊年なし

これとは別に孔夫子旧書網に掲載された該書の写真が3種類ある。2種は上下別冊および合冊のもの。吳門天笑生訳、上海北京・有正書局、奥付刊年なし。残りの1種は下冊のみ、吳門天笑生訳、上海北京・有正書局、中華民國十三年八月再版とある。再版本は上海図書館目録に見える。



『時報』1910.4.11

[編年④1980]宣統二年三月初二日 (1910.4.11) 至十二月十八日

[編年⑤2065]宣統二年八月十九日 (1910.9.22) 因訳者病暫停刊載

[編年⑤2068]宣統二年八月二十七日 (1910.9.30) 訳者病仍不能執筆

[編年⑤2071]宣統二年九月初七日 (1910.10.9) 〃  
に恢復連載『空谷蘭』を配置するのは不適切  
(注: [編年⑤2088]宣統二年十月初七日 (1910.11.8) が『空谷蘭』の連載再開だがその記載がない) 〃

[編年⑤2121]宣統二年十二月十八日 (1911.1.18) 畢



『時報』1910.11.8

新聞連載が中断していることがわかる。包天笑の病気を理由にした。新暦1910年4月11日に連載を開始し翌1911年1月18日に終了する。仮にそれよりも前に単行本が出版されていたとしたら連載が止まるという事態は生じなかっただろう。新聞連載が先行しているというのが重要だ。

というわけで連載終了後に単行本になったと考えてよい。新聞広告を同じく同書より引用する。広告本文にある記号は陳大康が施したものと思う。

[編年⑤2309]『時報』宣統三年十二月二十

四日 (1912.1.12) 有正書局廣告「此書為吳門天笑生所訳、曾排日登載《時報》小説欄(欄)、久為社会歡迎。另印出書、計上下兩冊、定價大洋七角」

『時報』連載完結は1911年1月だった。1年後の1912年1月に単行本2冊で刊行された。実際の書物に刊年が記載されなかった理由は不明だ。広告に記されているのは『時報』連載後に刊年不記の2冊本が出現したという事実である。

そこで単行本の刊行については次のように補足説明することができる。すなわち「[編年⑤2309]『時報』宣統三年十二月二十四日 (1912.1.12) 有正書局広告により推定1912.1刊行」である。

2次資料を利用して得ることができた結論だ。ほぼ正確だと思う。

そうなると樽目錄第2版(1997)から第12版(2020)までの記載について疑惑が生じる。

包公毅訳『空谷蘭』は「有正書局 光緒34(1908)」だと記述する。刊年不記本とは別に1908年本の項目が立てられているのだ。2次文献によって推測される1912年刊行とは違う。また『時報』連載の時期とかけ離れる。それでは新聞連載の1910-11年よりも単行本(1908)の方が先行してしまう。連載状況と合致しない。

これには理由がある。柳存仁の教示(1996.8.24、10.1)によって包公毅『空谷蘭』の単行本刊年を光緒34(1908)年にした[樽本97][樽本17-309]。

柳存仁(1917-2009)は著名な学者で当時はオーストラリア在住であった。『空谷蘭』の原作について中国で従来からいられていたのとは別の記述が日本でなされている。そのことに関して問い合わせがきたという次第だ。1996年のことだった。それと同時に該訳書の単行本は1908年刊行だと教示をいただいた。

署名は「包公毅」、「一九〇八年(光緒三十四年)有正書局出版、共二冊」だと柳存仁はいう。

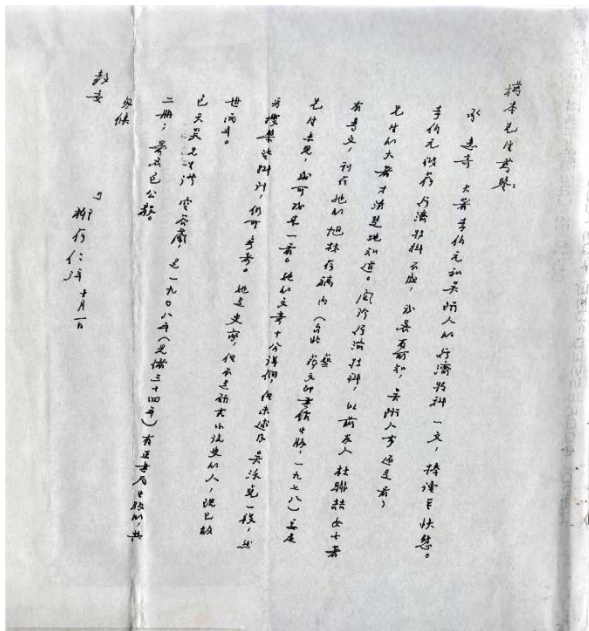


『野の花』原作誤解のはじまり——問題の所在

2

筆者が見ている涙香『野の花』は以下のとおり。

黒岩涙香訳『野の花』前後編 扶桑堂1909.1.2 / 5.2。国立国会図書館デジタルコレクション。略称[国会]  
「縮刷涙香集第四編」明文館書店1916.2.15 縮刷/1926.5.1縮刷八十版。架蔵  
初出は『万朝報』1900.3.10-11.9



柳存仁氏来信1996.10.1

筆者の知らない何かの根拠があるとしか考えられない。学識経験豊富な研究者だから実物にもとづいての指摘だろう。それを否定できる材料はその当時はなにも存在しなかった。だから樽目録第2版からは別項目を立てた。世界的に有名な柳存仁から提供された情報をそのまま取り入れたのが樽目録だ。まさか根拠がないとは思えない。

ところが現在にいたるまで出版を1908年と記載する『空谷蘭』の版本が出てこない。1924年再版本はある。しかし手持ちのもの、孔夫子旧书网、上海図書館の目録を見ても1908年に該当する書籍がないというのが事実だ。

上記のとおりあらためて検討した。くり返す。『空谷蘭』の『時報』の連載日時(1910-11)と刊行広告を見れば単行本は「推定1912.1刊行」とするのが妥当だ。

刊年についての結論である。樽目録が『空谷蘭』の刊年を「光緒34(1908)」とするのは誤りだと判断する。訂正する必要がある。ただし1908年本が存在すると確認できれば再度訂正すると余地を残しておく。



『万朝報』1900.3.10



包天笑訳『空谷蘭』が成立する経過を図式化すれば次のようになる。英文原作→涙香日訳→天笑漢訳である。全体の流れはそれで正しい。

包天笑が外国小説を漢訳するばあい多くは日本語本を使用した。該作品についても英語作品から直接漢訳したという可能性はないと考えて

よい(ハガード原作『迦因小伝』は楊紫麟が英語にもとづき翻訳し包天笑が文章化した。林紵方式と同じ)。ゆえに涙香『野の花』の日本語から包天笑『空谷蘭』へ直結する後半の経路部分は事実だ。英文原作さえ問題にしなれば『空谷蘭』の舞台化、映画化を独立させて論じることが可能である。

疑問が生じるのは前半の部分だ。黒岩涙香『野の花』(1909)の底本は誰の何という英語作品なのか。日本ではすでに結論が出ていると思われるかもしれない。長年にわたってほとんど定説になった見解がある。それが間違っているというのが本稿の主旨だ。

問題を再度整理しなおし新しい知見もつけ加える。

英語作品を涙香小史訳『野の花』と題して新聞連載をしたのが1900年だ。原作を明記していないから謎がはじまったといっている。

理解を助けるためにこれまで提出された原作者名だけをあげる。詳細は後に述べる。

簡単にまとめる。日本では緒方流水がクレイ原作だと1902年に指摘した。それとは別にトマス・ハーディ夫人を示したのが齋藤昌三(1933)、柳田泉(1935)および伊藤秀雄(1971)だった。アメリカではペリ・リンク(1981)が別のハーディ夫人を出す。中国ではそれらとは関係なく1962年に范煙橋がヘンリー・ウッド夫人を提出する。2012年に黄雪蕾がクレイ原作に言及した。

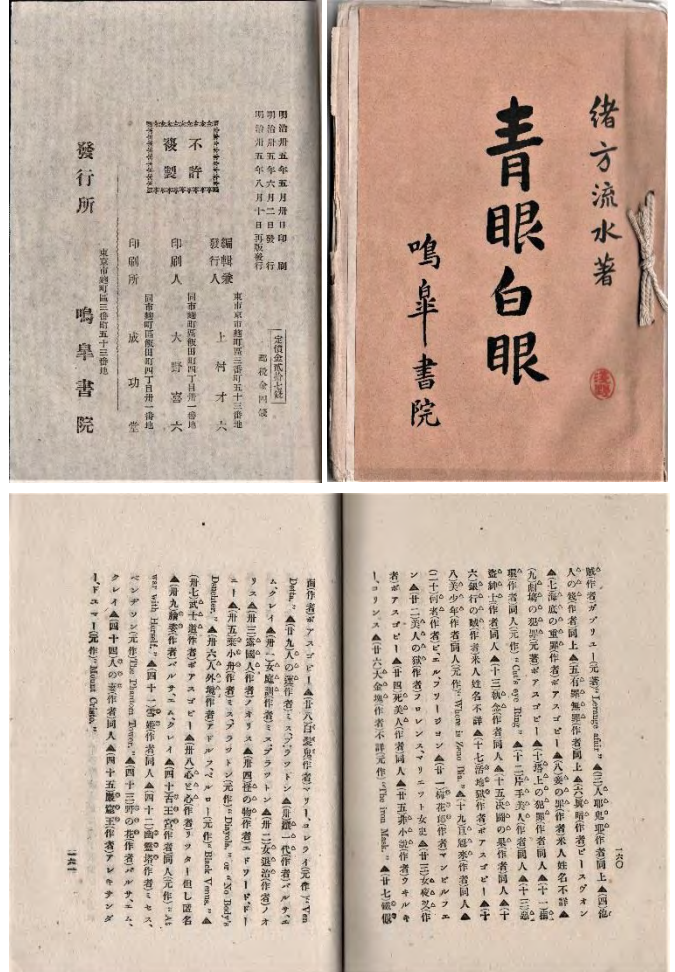
涙香日訳初出の1900年を出発点とすれば問題解決まで112年かかった計算になる。原作探索には長い時間が必要になることもある。そういう1例である。参考までにいえば菊池幽芳『乳姉妹』の底本がクレイ『ライル卿の娘』だと特定されるのに117年を要した<sup>4)</sup>。ほぼ同じくらいか。両書ともに原作が特定されるまでに1世紀を越えた。

さて『野の花』について意見の相違は大きくわけて5本の流れ、あるいは方向が存在する。

実質的には4名の女性作家だ。入り組んでいて少し複雑になる。

おおよその公表時間順に数字を振ってあらためて説明する。

1 クレイ説



緒方流水『青眼白眼』(1902)<sup>5)</sup>である。該書に収録された「黒岩涙香」の項目「(五)原作と作者」の記述が興味深い。合計45件の作品について注釈が施されている。本稿に関連するその部分だけを抜き出す。

▲(四十三)野の花(作者)バルサ、エム、クレイ。161頁

『野の花』の原作はバーサ・M・クレイだと書いてある。涙香と同時代人の指摘だ。さらに涙香訳そのものに原作者の名前が記されていないからなおさらひとつの重要な手がかりになる。ただし作品名までは明らかにしていない。

不思議なことに流水の記述はそれ止まりに終わった。齋藤昌三、柳田泉あるいは涙香研究家の伊藤秀雄は流水の著作を知っていたはずだ。しかし彼らは流水の記述を無視した(後述)。それを継承して探求する人はいなかったということだ。日本では1998年に流水は再び姿を現わすことになる[飯塚98-94][飯塚14-104]。

2 ハーディ夫人説

筆者の知る限り年表などでトマス・ハーディ夫人を指摘したのは齋藤昌三(1933)\*6が早い(これに先行する広告については後述)。

(明治42年)野の花 ハーディ夫人 黒岩涙香 扶桑堂 80頁

作品名は記されていない。ほぼ同時期に柳田泉「黒岩涙香翻訳小説目録」(1935)\*7が出た。こちらは(トマス・)ハーディ夫人および作品名を明記する。

野の花 明治33年万朝報3月11日。明治42年1月(前)ー5月(後)刊行、全2冊、原本ハーディ夫人『母の心』 49頁

これは以後の文献に引き継がれているように見える。

坂本由五郎、小澤明子「黒岩涙香」(1962)\*8には2ヵ所に出てくる。

野の花 万朝報 ミセス・トマス・ハーディ著、涙香小史訳 明33.3.10~11.9 431頁  
Thomas Hardy 夫人(英国) 野の花 The

Mother's Heart 462頁

伊藤秀雄『黒岩涙香その小説のすべて』(1971)\*9がある。涙香研究の専門書だから基本資料として利用されている。

『野の花』/『万朝報』(明治三十三年三月十日~十一月九日) 訳載。原本はミセス・トマス・ハーディ(英一八四〇~一九二八)著『母の心』(The Mother's Heart)の訳。295頁

トマス・ハーディ夫人(MRS. THOMAS HARDY, 1840-1928) 原著『母の心 THE MOTHER'S HEART』だと記している。ハーディ夫人の生卒年を1840-1928としている箇所に注目。

それを疑う資料がなかった。ただしどこから引っ張ってきたものか不明なのだ。また流水のクレイ原作という指摘があるにもかかわらず伊藤はそれを注記すらしていない。さらにいえば『母の心 THE MOTHER'S HEART』というだけで作品そのものを解説しない。たぶん入手できなかったのだろう。つまり伝聞に終始した。

トマス・ハーディ夫人とする根拠は当時の広告にあるという[飯塚98言及なし][飯塚14-104]。筆者が所蔵する縮刷涙香集から広告2種類\*10を掲げる。

1 扶桑堂 2 明文館

縮刷涙香集 (第三編)

ミセス・トマス・ハーディ 原著  
家庭小説  
野の花  
(町田三氏装及書)

定価 金壹圓拾銭  
送料 金拾銭

紙函入・装綴 金拾銭  
紙函入・装綴 金拾銭

総色版口繪入・装綴 金拾銭  
紙函入・装綴 金拾銭

三六判 貼分上製美本  
紙函入装綴  
金文字 紙函入装綴  
総ボイント 五百〇二頁  
定価 貳圓四拾銭  
書留送料 金貳拾銭

若き母の心を母たる前より遺憾なく描き、中に野心の猛毒を點綴し、最後に清苦の勝利を示したもので、世界均等に小説、小説の筆法は、之に原作以上の興味を加へてある。種々の英傑がレオンも、遂に「金婚式」の幸福な一語を破る事は能きなかつた。人類生活の中、最も清きものは母の心である。家庭小説の權威、The Mother's Heartの縮刷版に成る。母たる人、母たらん人、父たる人、父たらん人に是非一讀を薦む更に之を子女に讀ましむれば、心すや後を打て唯よあらん。

振發 行發堂桑扶 出版  
七四一五(一) 價

縮刷涙香集第四編

ミセス・トマス・ハーディ 原著  
家庭小説  
野の花  
(町田三氏装及書)

定価 金壹圓拾銭  
送料 金拾銭

紙函入・装綴 金拾銭  
紙函入・装綴 金拾銭

三六判 貼分上製美本  
紙函入装綴  
金文字 紙函入装綴  
総ボイント 五百〇二頁  
定価 貳圓四拾銭  
書留送料 金貳拾銭

若き母の心を母たる前より遺憾なく描き、中に野心の猛毒を點綴し、最後に清苦の勝利を示したもので、世界均等に小説、小説の筆法は、之に原作以上の興味を加へてある。種々の英傑がレオンも、遂に「金婚式」の幸福な一語を破る事は能きなかつた。人類生活の中、最も清きものは母の心である。家庭小説の權威、The Mother's Heartの縮刷版に成る。母たる人、母たらん人、父たる人、父たらん人に是非一讀を薦む更に之を子女に讀ましむれば、心すや後を打て唯よあらん。

振發 行發堂桑扶 出版  
七四一五(一) 價

版元の広告であることが重要だ。版元が『野の花』の原作は「ミセス・トマス・ハーディー」の作品『母の心 THE MOTHER'S HEART』だと記している。ならばそれを信用しない人はいないだろう。斎藤昌三たちのことを言っている。不思議ではない。ただし作品名は書かれているがその詳細は不明である。どこか奇妙だがこれが継承された。

ハーディ夫人説は中村忠行「清末探偵小説史稿3」(1980)<sup>\*11</sup>にも見える。

[中村S4-54] (黒岩) 涙香訳『野の花』  
(Mrs. Thomas Hardy “*The Mother's Heart.*”)の重訳

日本では主としてトマス・ハーディ夫人原作とする。これが日本発の定説となった。

トマス・ハーディ夫人説を導入したのは目録でいえば樽目録初版(1988)だ。范煙橋のいう(英)亨利荷特(注:MRS. HENRY WOOD)著を記述する(後述)。くわえて注釈欄に日本での定説であるMRS. THOMAS HARDY “THE MOTHER'S HEART”を示す。ウッド夫人とハーディ夫人を併記して判断を保留したというわけ。原作で確認することができなかったから。まさかこれにもとづいて中国人研究者が「亨利荷特」と「MRS. THOMAS HARDY」を同一人物だと誤解しようとは思ひもなかった。

一方、中国で認定しているのはヘンリー・ウッド夫人作品だ。涙香『野の花』の原作者について日中は無関係にそれぞれが別人を指摘するという状況が長く続いた。

1996年に前述柳存仁が登場する。日本で記述されるトマス・ハーディ夫人説をどこかで見たようだ。范煙橋が書いている亨利荷特(MRS. HENRY WOOD)の著作とするのは誤りなのかという問い合わせだった。伊藤秀雄の著作から該当部分を複写して送る。返事があってトマ

ス・ハーディは1840年生まれで1928年没だ、それでは伊藤が示すミセス・トマス・ハーディの生卒年と同じではないか、と。なるほど柳存仁のいうとおりだ。

調べてみたが該当する作品が見つからない。またトマス・ハーディ夫人は先妻と後妻のふたりがいた。そこで年齢との関係も考えて次のようになった。「原作はTHOMAS HARDYの後妻FLORENCE EMILY DUGDALE(1881-1937)よりも先妻EMMA LAVINIA GIFFORD(1840-1912)の作品である可能性が高い」と補足したわけだ。可能性をいうだけ。特定してはいない。作品『母の心 THE MOTHER'S HEART』はとうとう見つけることができなかつた。

それ以後トマス・ハーディ夫人の著作とする記述がいくつかある。簡単に述べる。

郭延礼『中国近代翻訳文学概論』(1998/2005)<sup>\*12</sup>が「《空谷蘭》(英国亨利荷特著, Mrs. Thomas Hardy) 就是據黒岩涙香的日記本《野之花》転訳的」(428頁/343頁)と説明する。その根拠は樽目録初版(1988)だ。目録に併記してある亨利荷特(MRS. HENRY WOOD)とMRS. THOMAS HARDYの区別がつかなかったようだ。同一人物だと誤解した。のちの沈慶会、闕文文に影響を与えた可能性もある。

森川(麦生)登美江訳、中井政喜訳『二十世紀中国文学図誌』<13>(選訳2001)<sup>\*13</sup>の注35「有正書局、原作はMRS. THOMAS HARDYの“THE MOTHER'S HEART”、日本の黒岩涙香訳からの重訳。『新編清末民初小説目録』(樽本照雄編、1997・10)による」とする。樽目録第2版のことを指す。

沈慶会『包天笑及其小説研究』(2006)<sup>\*14</sup>は「《空谷蘭》的原著者為英国亨利荷物(Mrs. Thomas Hardy), 包天笑根據黒岩涙香的日記本《野之花》転訳(88頁)と書いている。沈慶会にとっては典拠を明記する必要がないほど

の事実なのだ。その誤記は文章の類似から見るに「参考文献」173頁にある郭延礼の著作からの引用だろう。

李艶麗「晩清日語小説翻訳書目録(1898-1911)」(2014) \*15は[艶麗14-76] (英) MRS. THOMAS HARDY “THE MOTHER'S HEART” とする。

宋韻声『中英翻訳文化交流史』(2017) \*16は[韻声17-89]英国トマス・ハーディ夫人著。據黒岩涙香の日記本『野之花』転訳とする。

以上のとおりトマス・ハーディ夫人説は日本起源で有力だった。

### 3 もうひとりのハーディ夫人

アメリカのペリ・リンク (Perry Link) “Mandarin Ducks And Butterflies” (1981) \*17は涙香『野の花』の原作者について別のハーディ女史を提出している。

Pao T'ien-hsiao's story “Orchid in an Empty Vale” (*K'ung ku lan*), of which Pao was very proud, was based on a story from the pen of Kuroiwa Ruiko} called “The Wild Flower” (*No no hana*) which was serialized in 1900 in the Tokyo newspaper *Yorozu Chōhō*. Kuroiwa's story was, in turn, a creative translation of a story which appeared in a popular British magazine as “The Mother's Heart” by Lady Mary Duffus Hardy, wife of Sir Thomas Duffus Hardy, Deputy Keeper of Her Majesty's Records. pp.136-137

包天笑が誇る小説『空谷蘭』は黒岩涙香の『野の花』にもとづいておりそれは1900年の『万朝報』に連載された。黒岩の物語はイギリスの大衆雑誌に『母の心』として出現したものの創造的翻訳である。その作者メアリ・ダファス・ハーディ女史はトマス・ダファス・ハーディ卿(女王陛下の公文書記録局の副局長)の妻である。

作品名を見れば日本でいうトマス・ハーディ夫人の『母の心』と同じである。違うのは同じハーディでも Mary Duffus Hardy という別人であることだ。こちらのハーディ夫人は小説家であり旅行作家で有名だという。ただし『母の心』(The Mother's Heart) という作品は見当たらない。

似たような名前が出てきて混乱しそうになる。それぞれの名前と生没年を示す。

トマス・ダファス・ハーディ (Thomas Duffus Hardy, 1804-1878)

後妻メアリ・ダファス・ハーディ (Mary Duffus Hardy, 1825-1891)

トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928)

先妻エマ・ラビニア・ギフォード (Emma Lavinia Gifford, 1840-1912)

上のようにまとめたがどのみち涙香『野の花』の原作者ではない。参考までに述べた。

時間的な順序に従えば次は中国で広まり定説になったウッド夫人説である。日本に比較して提起された時期はかなり遅れる。しかも流水、昌三、泉らの記述とは全く関係がない。

### 4 ウッド夫人説

范烟橋「民国旧派小説史略」(1962) \*18が比較的早い。とはいえ范煙橋よりも以前に誰かが言及している可能性は残る。包天笑『空谷蘭』は1910年代に舞台(文明戯)にかけられた。1920年代には映画化されてもいる。それに関連して原作を明らかにしている人がいるかもしれない。ただ今のところそれに言及する文献は見つかっていないようだ。考えるに研究者は『空谷蘭』の底本日訳『野の花』まではさかのぼる。それは舞台、映画と関係するからだ。その先にある英語原作までは追求する必要がない

という判断かもしれない。説明する研究者はほとんどいなかった。

上記の史略は『鴛鴦蝴蝶派研究資料』(1962)のために書かれた。

学界の主流である左翼文芸派は「新派」を自認する。それから見れば以前の作品は「旧派」になるという意味である。論じ方には定型がある。政治基準を最優先する。賞賛か批判か、賛成か反対かの結論を最初に下す。それに適合する材料だけを収集して立論するのだ。自説にとって不都合な資料は無視する。一面からいえばこれは効率的なやり方だろう。

それとは正反対の研究方法があることも書いておく。多くの事実を収集したあとにそれらを総合して判断を下す。資料収集に時間がかかるし判断力が問われるからこれを実行する研究者は多くない。

政治の潮流が変化すれば評価もそれにつれて変更される。一般研究者の知らないところでそれが行なわれる。1例をあげればあれだけ激しく展開した胡適思想批判運動だ。しかし「文化大革命」後には何もなかったように知らん顔をした。耿雲志『胡適研究十論』(上海・復旦大学出版社有限公司2019.7)は「1979年の出版禁止から今日にいたるまで……」(15頁)と書いている。すなわち1979年までは胡適関係書(批判書は除く)は出版禁止だったということがわかる。胡適批判は中止すると表立って宣言されたことはない。たぶん上級の指示によって留学日記、全集、文集、書簡集、専門書などの出版許可が下された。そうすることで方針が変わったことを示したつもりらしい。一般の研究者は出版界に生じた変化を見て評価の方針変更を感じ取る。それしか研究についての動向をさぐる方法がなさそうだ。大きく管理されている学界というのは筆者から見れば普通に想像がつかない。個人の感想だ。

清末民初小説研究についても同様である。林訳批判は長期間にわたり当然のように実行され

ていた。「文化大革命」後の1980年代になってからたしかに資料集、専門書もぼつぼつ刊行されはじめた。ところが21世紀になって評価の基本方針が変化しつつあるように感じる。その変更は説明もなく唐突に行なわれる。林紓については「戯曲を小説にかえて翻訳した」と必ず説明して批判するのが定石だった。それを言わなくなる。よほど注意していなければ気づかない。

さて「鴛鴦蝴蝶派」という名称そのものが左翼文芸派によって命名された。蝶よ花よを主題とし恋愛花盛りの暇つぶし小説でしかない。当時の主流派を貶める目的のために準備された用語であることは明白だ。そういう研究状況が過去にあった。そのなかで資料集を編集刊行するのはあくまでも批判をするための材料を提供するというのが建前になる。反対し批判する姿勢を明確にして前面に押し出さなければ出版そのものが許可されなかったと理解できる。それでも刊行されたのは一定の認識が学界にあったのだろう。

約半世紀以前の中国学界で批判の対象となっている清末作家についても扱いは同じだった。魏紹昌が編集した複数の資料集には苦心のあとがあらさまに見える。ひとつの工夫は魯迅の文章を大きく掲げることだ。当時誰も批判できなかった魯迅を盾にした。彼を出すことによって批判を回避する。続いて鴛鴦蝴蝶派批判の文章を前部に集める。そういう編集を行なわざるをえなかった。

別の例をあげよう。『老残遊記』研究には胡適論文が欠かせない。しかし胡適思想批判が激しく実行された歴史が背景にある。魏紹昌編『老残遊記資料』(北京・中華書局1962.4)は胡適論文を収録するに当たり弁解せずにはすまない。「反動的文人胡適と林語堂も『老残遊記』の序文を書いている。このふたつの反面文章は我々が批判し参考とするのに便利のように附録として収録した〔反動文人胡適和林語堂也写過《老残遊記》的序文。這兩篇反面文章，我們為

了便于批判, 参考起見, 也収作附録]。この説明こそが苦心の表われである。

今から思えば資料集が刊行されるだけまじな状況だった。赤いビニール表紙の『毛主席語録』と魯迅作品の2種類しか出版されなかった「文化大革命」の10年間を見ればそれがよくわかる。

それにしても長年にわたり負の評価を下されていた清末民初小説研究という分野だ。外国翻訳小説はそれに加えて基本が「中国文学ではない」と軽視される。筆者は中国の研究者(古典文学専攻)から直接そう言われたことがある。研究者が増えることは期待できないと考えるのが普通だった。昔の話だ。

閑話休題。どういう名目であろうとも収録された文章が意図的に改竄されていなければ研究に利用して差し支えない。事実関係の部分を注視すればよい。

さて范煙橋が包天笑の底本として涙香『野の花』の原本に言及しているのを見よう。具体的に書いてある。

包氏自言最愛日本黒岩涙香の翻訳小説。黒岩訳的《野之花》, 原著者為英国女作家亨利荷特, 出版于十九世紀前半葉。世界各国的訳本有三十余种。日訳本名《野之花》, 包氏転訳過來, 改名《空谷蘭》。起初連載于《時報》, 每日僅五六百字, 後由有正書局印單行本。323頁

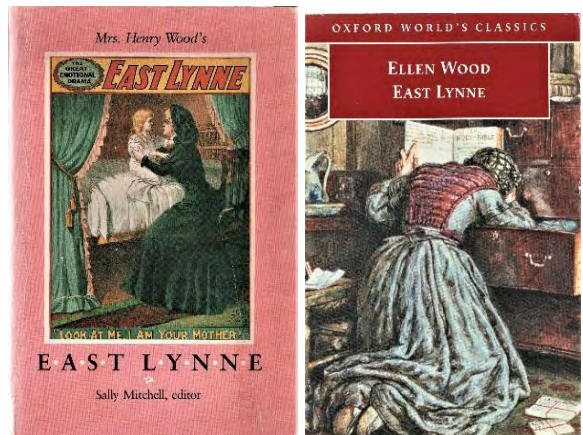
包(天笑)氏は日本黒岩涙香の翻訳小説が最も好きだと言っていた。黒岩訳『野の花』は原著者がイギリスの女性作家ヘンリー・ウッドでありそれは19世紀前葉に出版された。世界各国での訳本は30余種になる。日訳本『野の花』は包氏が転訳して『空谷蘭』に改名した。はじめは『時報』に連載され毎日500から600字にすぎなかった。のちに有正書局より単行本が出た。

ひとつは新聞連載があつて単行本になった。その順序を述べている。本稿において刊行状況を推測したと一致する。

ふたつは包天笑の漢訳『空谷蘭』の底本が涙香『野の花』だという事実を明らかにした。『空谷蘭』そのものに涙香の名前など記載されていない。書き方を見ると范煙橋(1894-1967)は包天笑(1876-1973)から直接聞いた話のようだ。兩人に年齢差はある。1910年代に范煙橋が『時報』に投稿したのがきっかけで主編の包天笑と面識を得たという。時代を共にし同じ業界に在籍したことがある。ふたりの会話が涙香翻訳に及んだ機会があつたとしても不思議ではない。范煙橋が涙香の名前を示した点だけでも記述の信頼性が高い。

みつつはヘンリー・ウッドの名前を出したことだ。ただしヘンリー・ウッドを女性作家とするのは間違い。ここはその夫人という意味だと理解する(以下いちいち注しない)。ヘンリー・ウッド夫人原作を涙香が『野の花』に翻訳した。それにもとづいて包天笑が漢訳して『空谷蘭』という順になる。

ヘンリー・ウッド夫人(MRS. HENRY WOOD 又は ELLEN WOOD)はエレン・プライス(ELLEN PRICE, 1814-1887)である。その著作『イースト・リン EAST LYNNE』(1861)で知られる。



RUTGERS UNIVERSITY PRESS, 1984.

OXFORD UNIVERSITY PRESS, 2005

范煙橋の指摘で注目すべき点がいくつかある。

ただ奇妙なのはヘンリー・ウッド夫人の名前は示したがその根拠には言及しなかった。また原作についても題名を書かない。

しかし『空谷蘭』そのものに記載のない涙香『野の花』を明記したくらいだ。読んだ人はヘンリー・ウッド夫人についてもその証拠を出す必要がないくらい自明の事実だと受け取った。同時代人の記憶として貴重なものだという認識が学界で共有されたわけだ。それ以降ヘンリー・ウッド夫人説が主として中国では定説になった。

例をあげれば魏紹昌『我看鴛鴦蝴蝶派』(1990)<sup>\*19</sup>だ。「『空谷蘭』和『梅花落』两部小説，為十九世紀前半葉英国女作家亨利荷特所著，故事講完，曲折有味，包天笑是日本黒岩涙香改編過の日訳本再編写過來的，一切都中国化了」(82頁/72頁)

魏紹昌は范煙橋の前出文章を読んでいる。だからヘンリー・ウッド夫人を出してきても納得がいく。ただしそれが范煙橋によっていると書かない。

問題は追加した『梅花落』だ。該訳本にも底本の表示はない。だから『梅花落』が涙香の日本語訳にもとづいていたと説明する部分は新しい。たぶん包天笑の回憶録によっているのだろう。しかし『梅花落』をウッド夫人の作品にしたのは誤りだ。また涙香『野の花』を提出しないのも不十分だろう。というように正誤が混交している説明である。

朱聯保『近現代上海出版業印象記』(1993)<sup>\*20</sup>がある。「包天笑由日文轉訳の英国女作家亨利荷特著的『空谷蘭』，以及所訳日本小説『梅花落』，亦由該局（有正書局）刊行，當時頗為流行」(215頁)と説明する。范煙橋よりは魏紹昌により近い。ここも伝聞であることがわかる。以下同様である。

ヘンリー・ウッド夫人原作ならば『イースト・リン』である。中国では長らくそう認定され続けた。

『空谷蘭』は映画化されたからその方面からの言及が多い。

董新宇『看与被看之間』(2000)<sup>\*21</sup>は次のように書いた。「英国女作家亨利・伍德（Henry Wood）的暢銷小説『East Lynne』經日本翻譯家黒岩涙香訳成日文，題為『野の花』。包天笑依據『野の花』訳成中文，在『時報』連載，題為『空谷蘭』」(78頁)「『空谷蘭』的原作者亨利・伍德夫人（Mrs. Henry Wood）及其原著『里恩東鎮』(East Lynne)」(79頁)

訳すまでもない。ヘンリー・ウッド夫人の『イースト・リン』から黒岩涙香『野の花』さらに包天笑『空谷蘭』とすべてを明らかにしたつもりだ。ただしそのもとづいた先行文献を示さない。説明する必要のない事実だという考えらしい。あるいは引用を重ねて最初に指摘した人もわからなくなった。

董新宇は自分の認識に絶対的な自信があったようだ。リンク（林培瑞）が持ちだしたメアリ・ダファス・ハーディを否定する。すなわち「尽管林培瑞对这部小説的追根溯源并不準確<sup>②</sup>」(80頁)と批判した。その注に「<sup>②</sup>根據林培瑞：『野の花』英文原著為 Lady Mary Dulfus Hardy “The Mothers Heart”」と引用して英語綴りが不正確だ。

リンクを名指しして否定するくらい董新宇は自説に強い自信を持っている。本文について綿密な比較対照を行なって得た結論だからなおさらのことだ。しかし先行文献と同じくそうだと信じ込んでいるだけ。後述するように涙香『野の花』の底本はウッド夫人『イースト・リン』ではないのだ。「決して正確ではない」と他人の説明を否定する本人自身が正確ではない。笑おうにも気の毒で顔面が凍りつく。

陳大康の以前の著作『中国近代小説編年』(2002)<sup>\*22</sup>も従来の説明を採用した。ただし英文原作と涙香日訳の題名には触れない。次のとおり。



【編年231】(光緒三十四年(1908))有正書局出版《空谷蘭》二冊三十二回,署“天笑生(包天笑)訳”。此作為(英)亨利荷特著,(日)黒岩涙香原訳。

刊行を「光緒三十四年(1908)」とする部分はたぶん樽目録によったのだろう。この時の陳大康は各種目録を集めて上の小説年表を編纂した。のちの『編年史』を編集する準備だったようだ。

それから12年後の『編年史』では刊年を三年後の宣統三年に訂正する。それ以外の内容はほぼ同じである。

【編年⑤2320-21】(宣統三年十二月)上海有正書局出版《空谷蘭》,署“吳門天笑生(包天笑)訳”。此作為英國亨利荷特著,日本黒岩涙香原訳。書共二冊三十二章,未列標題。

ここでもヘンリー・ウッド夫人説がくり返されている。先行文献を取り入れているとわかる。正しくない。

包天笑『空谷蘭』と涙香『野の花』が基づいた英文原作を探索する過程で黄雪蕾論文は重要な役割をはたす。のちに新しい情報をもたらすのだ。しかし以前はウッド夫人説で固まっていた。黄雪蕾は樽目録第3版(2002)をどこかで見たのかもしれない。前述のとおり樽目録には『野の花』の原作として亨利荷特(ヘンリー・ウッド夫人)をあげ注釈に MRS. THOMAS HARDY (トマス・ハーディ夫人)とする。中国で定説となっているウッド夫人説とは異なっていることに気づいたのか2009年に『空谷蘭』の原作はヘンリー・ウッド夫人『イースト・リン』だと知らせがあった。それを樽目録第4版(2011)が採取して「(黄雪蕾) MRS HENRY WOOD (ELLEN WOOD) “EAST LYNNE”」と注釈欄に追加した。

こうして樽目録ではトマス・ハーディ夫人とヘンリー・ウッド夫人を併記している。樽目録は探索の手がかりを与えることが目的だ。先行文献をできるだけ参照して記録する。その結果、複数の可能性がありどれかに特定できなければそのまま掲げる。読者に最終的解決をゆだねている。自分で実物を探索して問題を解決してほしい。そうすることが期待されているという意味だ。いわば論文の種を提供しているといってもいい。それに気づくかどうかは個人による。

あとは簡単に書名を掲げるだけにする。網羅はしていない。内容については注を見てほしい。

温尚南『姑蘇影人』(2012)<sup>\*23</sup>は映画脚本の『空谷蘭』を説明する。その原作者がヘンリー・ウッド夫人であり日本の黒岩涙香が日訳して『野の花』だ。そこから包天笑漢訳『空谷蘭』になったという。従来どおりの解説である。

映画関係でもうひとつだけを示す。邵棟『紙上銀幕:民初的影戯小説』(2017)<sup>\*24</sup>は温尚南の説明を注114(84頁)にそのまま引用している。

新聞掲載の翻訳小説を扱うのが關文文『晚清報刊上の翻訳小説』(2013)<sup>\*25</sup>だ。こちらは亨利荷特について MRS. THOMAS HARDY と注記して誤る。亨利荷特は言うまでもなく MRS. HENRY WOOD でなければならない。ウッド夫人とハーディ夫人を混同している。樽目録第3版にもとづいて独自に解釈したのかと思ってみたりする。あるいは先行する郭延礼著作に影響を受けたか。間違った理由はわからない。

以上を見れば黄雪蕾らの少数を除いて原作について説明する文章は少ない。ヘンリー・ウッド夫人を先行文献から引用しているだけのように見える。ましてや作品が何かについて具体的に言及することもない。以上気のついたものだけをあげた。

くり返す。基本的にクレイ、トマス・ハーディ夫人と別のハーディ夫人およびヘンリー・ウ

ッド夫人の4説がある。

以上のとおり複数の名前があがったままで。問題はそこで停止しているような気がした。研究者は伝聞をくり返していたといっても同じことだ。翻訳研究の分野は困難がつきまとう。しかたがないという人もいるだろう。

だが新たな展開がすでに始まっていた。

## 5 再びクレイ説

「再び」と表現した。だが日本の流水説が見直されてバーサ・M・クレイが出てきたわけではない。それとは関係なく偶然のようにしてクレイ説が出現したのだった。

研究上の転換点となる黄雪菴の論文2本は以下のとおり。

1 黄雪菴 Xuelei Huang, “From East Lynne to Konggu Lan: Transcultural Tour, Trans-Medial Translation”, *Transcultural Studies* 2012. 2, Universitat Heidelberg.

2 黄雪菴「跨文化行旅, 跨媒介翻譯: 從《林恩東鎮》(*East Lynne*) 到《空谷蘭》, 1861-1935」『清華中文學報』第10期2013.12 電字版。

上の1英語論文を基本にして下の2漢語論文が書かれた。

英語論文では主題であり漢語論文では副題にした「『林恩東鎮 (*East Lynne*)』から『空谷蘭』へ」が従来からの見方を示している。『イースト・リン』を出発点にして涙香『野の花』から包天笑の漢訳『空谷蘭』になったという認識だ。これが中国における従来からの定説だった。

その定説どおりに『イースト・リン』から漢訳『空谷蘭』の変容を主として論じる。ただし黄雪菴は論文途中で部分的に修正変更を加えた。

ある国際学会における発表がきっかけだったそう。日本の学者サトル・サイトー (Satoru Saito 崔文東注: 斉藤悟)<sup>\*26</sup>が涙香『野の花』の原作はシャーロット・メアリ・ブレイム

Charlotte Mary Brame (バーサ・M・クレイ Bertha M. Clay) 『女人的錯 A Woman's Error』だと指摘した (125頁)。日本語で示せば『女の過ち』である。

黄雪菴からの知らせを受けて清末小説研究会ウェブサイト2013年1月11日付および翌12日付でこの新しい発見を掲載した。

バーサ・M・クレイの名前は再登場だ。しかし『女の誤り』という作品名は新しく指摘された。こうして黄雪菴論文に言及する文章が出てくるという展開になった。

新旧の研究変化を知るには飯塚容論文を見るのが理解しやすい。同内容の論文2本が書かれている。その時間差で黄雪菴の説明を紹介しているかないかの違いが明らかだ。

はじめはクレイかハーディ夫人かと不明のままにしていた。

[飯塚98-95]あるいは『野の花』の原作は、バルサ・エム・クレイを擬した別人 (ミセス・トマス・ハーディ?) の創作であったのか。今後の研究課題としておく。

「バルサ・エム・クレイを擬した別人」のあとに「(ミセス・トマス・ハーディ?)」と書いている。ふたりは別人だが「擬した別人」とは同一人物だと考えていたのだろうか。よくわからない疑問を提出している。トマス・ハーディ夫人から離れることができなかつたらしい。

その6年後だ。疑問に残っていた部分に黄雪菴論文が投入される。まず該文からヘンリー・ウッド夫人『イースト・リン邸』を取り出した。研究経過を説明している。

[飯塚14-106]黄雪菴は映画化された『空谷蘭』への関心から種本さがしをした結果、イギリスの女性作家エレン・ウッド (Ellen Wood) の小説『イースト・リン邸 (*East Lynne*)』にたどり着く。(後略)

とはいえウッド夫人の作品は涙香『野の花』とは異なる部分も多い。そうして結論は次のようになる。

[飯塚14-107]そこで黄雪蕾論文がさらに、『イースト・リン邸』と『野の花』の間に介在すると推定したのは、シャーロット・ブレムの小説“*A Woman's Error*”だった。ならば、先のバーサ・エム・クレイ説が正しかつたことになる。黄雪蕾はブレイム(クレイ)の作品を一八六三年以降の出版だろうと考察しているから、『イースト・リン邸』の模倣作というわけか。筆者はまだ、稀観本の“*A Woman's Error*”を確認できていないので、これ以上の深入りは避け、今後の課題としておく。

原本は未見だから結論は先送りにした。慎重な態度を示したわけだ。またサトル・サイトーの名前は出していない。その後解決論文を発表しているかどうかは不明だ。

クレイからはじまった。トマス・ハーディ夫人、もうひとりのハーディ夫人さらにヘンリー・ウッド夫人を経た。そうして最後にはクレイ『女の過ち』に到着したというわけ。以上の大概は前述のとおり2013年1月時点で明らかになっている([樽本97]の増補版補記、清末小説研究会ウェブサイト2013.1.11、12付)。

大体の経過を視野に入れて書かれたのが楊文瑜+鄒波論文[楊鄒16]だ。先行文献を示しながら記述するのがよい。わざわざそう書くのは先行論文を無視する文章が多くあるからだ。

ただ包天笑『空谷蘭』の刊行を「1908年」(177頁)と誤るのは樽目録を引用したからだろう。これはしかたがないか。

また樽目録第3版の刊行を「2003[2]」と間違(マ)う(180頁注11)\*27。それよりも樽目録第6版(2014)を見ていないのは不思議に思う。

時間的に参照できたはず。第6版には黄雪蕾論文を引用してクレイ『女の過ち』をすでに明記しているからだ。

先行文献の取りこぼし、小さな誤りは文字通り瑕瑾である。筆者が[楊鄒16]を高く評価する理由はクレイ作品を実物で見ているからにほかならない。涙香『野の花』とクレイ『女の過ち』の原文を比較対照して検討しているのが新しい。該論文のばあいは正しい先行論文を十分に読み込んで正しい解答に到着したということが出来る(その逆は菊池幽芳『乳姉妹』の例だ。その原作がクレイ『ドラ・ソーン』だとする誤った先行論文を疑わなかった。必然的に正しくない結論にたどり着いた。そういう単純な構造だ)。

[楊鄒16]の主旨はその論文名「『野の花』の種本と黒岩涙香の訳述に関する考察」に表わされている。涙香『野の花』の底本を特定することに重点を置いている。包天笑の漢訳『空谷蘭』と比較対照しているわけではない。念のため。

現在、中国では説明なしで当然のようにクレイ作品だとしている。

張玉「1920年代の中国における黒岩涙香『野の花』の受容」(2018)\*28は「『野の花』は黒岩涙香がイギリス女流作家バーサ・エム・クレイ(Bertha M. Clay)の家庭小説*A Woman's Error*を翻訳した小説である」(148頁)と書くだけ。先行文献を明示する必要を感じていないようだ。「事実は誰が発見しても事実にすぎない」という中国特有の認識を実践しているのだろう。引用するだけで探す努力を自分ではしない。そういう例(ネット2019.10.22/陳年膠捲)を見て落胆する。

### クレイ『女の過ち』と涙香『野の花』

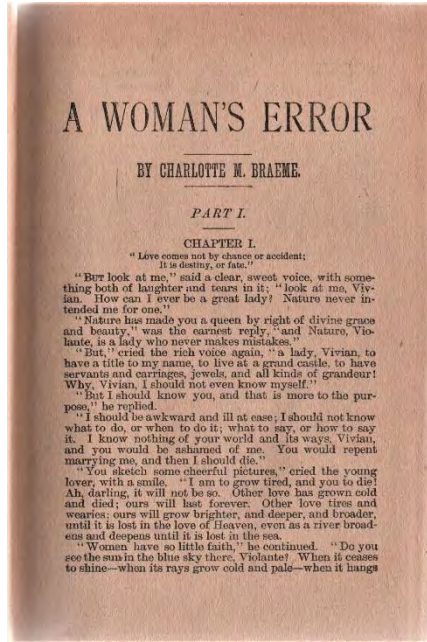
涙香『野の花』の冒頭部分から紹介する(引用は1926.5.1縮刷八十版による。ルビは省略。

[ ]は初版[国会]との異同個所)。

一 [『話の初めより以前の一節』]

大事の子を兵隊に遣るのは何処の親も心快くは思はぬ者、けれど行く当人は少年の血気で、是から軍人の仲間に入と思へば肉も躍るほど気が勇む。

「では阿父さん御無事に」と分れを告げたは英国の田舎に住む老弁護士の息子である、一人の妹は有るけれど父の為にはタツター粒の男種、之を危険な兵隊に遣つてはと、親の心で様々に止めたけれど「ナニ今に勲章を下げて帰つて来ますよ」と天を衝くほどの意気で家を出たのは、兵士の年齢に未だ充[た]ぬ十九の少年、何故か唯だ兵隊に成り度がつて、誰の云ふ事も聴かず、… (後略)



物語の冒頭を示す。

章題の「話の初めより以前の一節」が示唆しているのは原作を省略、あるいは順序を入れ替えたという意味だとわかる。

クレイ『女の過ち』は次のとおり。

BERTHA M. CLAY (本名 CHARLOTTE M. BRAME) の“A WOMAN'S ERROR!”は雑誌“FAMILY READER”(1872-1873)連載\*29が初出だという。筆者が見ている単行本『女の過ち A WOMAN'S ERROR』の出版社はCHICAGO: M. A. DONOHUE & COMPANY (刊年不記)である。

CHAPTER I. “Love comes not by chance or accident; It is destiny, or fate.”

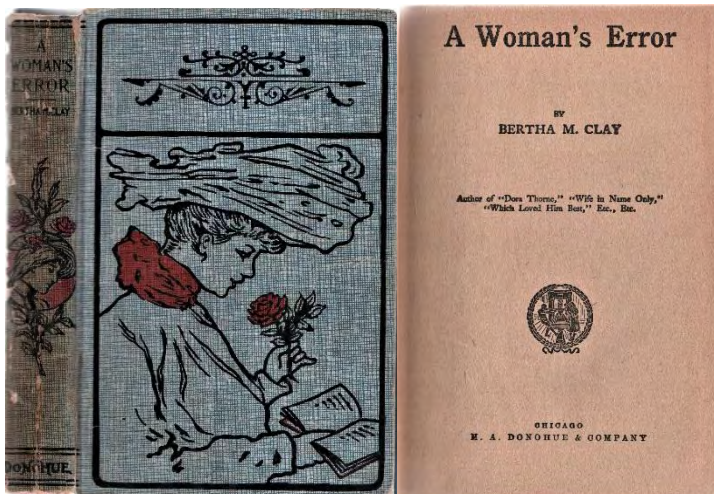
第1章 「愛は偶然あるいは思いがけずにやってくるものでもない。／それは運命あるいは宿命なのだ」

“But look at me,” said a clear, sweet voice, with something both of laughter and tears in it; “look at me, Vivian. How can I ever be a great lady? Nature never intended me for one.”

“Nature has made you a queen by right divine of grace and beauty,” was the earnest reply, “and Nature, Violante, is a lady who never makes mistakes.”

「でも、ほら」といづから微笑みと涙のまじるはっきりして甘い声がした。「ヴィヴィアン、こっちを見て。どうすれば私が素晴らしい貴婦人になれるというの。自然の女神は決して私をそうしようとは考えていなくてよ」

「自然の女神はあなたにふさわしい優雅さと美しさの女王にしたのだよ」と真剣な返答であった。「ヴィオランテ、自然の女



表紙、扉

神は決して間違いを犯さないものなのだ」

見るとおりクレイ原作『女の過ち』は涙香『野の花』の書き出しとはまったく異なる。

ヴィヴィアン・セルウィン卿 (Lord Vivian Selwyn, of Selwyn Castle) が弁護士 (country lawyer) の娘ヴィオランテ (Violante Temple) に求婚する場面が第1章だ。彼女の家はレスターシャー (Leicestershire) にある。ヴィオランテは身分が違うことを理由に結婚の申し出を拒む。第2章では議論の末にヴィオランテがようやく結婚を承諾する。

クレイ原作は男女の会話からいきなり始まる。渋る彼女を説得するのに2章を費やした。その後、過去にさかのぼって父ホレスの結婚、ふたりの子供をさずかり母親が急逝した経過を簡単に説明するという順序だ。

涙香は原作の順序を入れ替えた。出来事を時間のほぼ経過どおりに配列しなおしたのだ。その方が日本の読者には理解しやすいという判断だったのだろう。ただし父弁護士の過去は無視した。涙香訳はクレイ原作のその2章を日訳の「五 自分を知る知恵」「六 では何かお土産でも」に配置し第3章の少年が兵士になる箇所を冒頭に移動させた。

涙香にとって物語を会話から突然始めるのは違和感があったらしい。「大事の子を兵隊に遣るのは……」と書き換えながら独自の理解を示して展開した。

それにしても「では阿父さん御無事に」と分れを告げたのは……」というのはいずれにも唐突である。少年が兵隊へ行くという前段階の説明がないからだ。

クレイ原作はそれについて不十分ではあるが記述はしている。

The boy Bertie fared even better than his sister; his vocation, even in early life, was settled. He would be nothing but a

soldier. In vain Horace Temple painted the delights of the law, the church, the civil professions: he would have none of them.

パーティ少年は彼の妹よりもずっとうまく生きた。彼の職業は早くから決まっていたのだ。兵士以外のものになるつもりがなかった。ホレイス・テンプルは法律、教会、公職の楽しさを示したがムダだった。少年はまったくその気がなかった。

“I was born to be a soldier, papa.” was his invariable reply, “and something tells me I shall die one.”

Seeing all opposition was useless, Horace Temple, like a sensible man, did his best. p.11

「生まれながらの兵士なんだ、父さん」というのが彼の変わらぬ返事だった。「どうせひとりて死ぬんだって」

だからすべての反対はムダだった。ホレイス・テンプルは理知的な人間らしく彼の最善をつくしたのだった。

兵士になると決心した息子 (Bertie Temple / 陶村時之介 / 陶村時介。注：原文 / 涙香訳 / 天笑訳の順。以下同じ) がいる。頑なに思い込む息子を前にしては反対しても役には立たない。なすすべがなく困惑する父親 (Horace Temple / 陶村時正 / 陶村正毅) という状況が平素からあったとわかる。なぜ少年が兵隊へ行きたがるのか。その理由は不明のまま。クレイ自身がそこを説明する必要性を認めていない。なぜなら息子がインドへ派遣されて死ぬことが小説『女の過ち』にはあらかじめ設定されていたからだ。少年の上官はヴィヴィアン卿である。少年は志願のうえ命令どおりに情報を目的地に届けて死んだ。少年の遺髪を持ってテンプル家を訪問したヴィヴィアン卿はその妹ヴィオランテ (Violante Temple / 澄子 / 初珠) と会う。これが筋書きである。少年の死はふたりが知り合

うきっかけとなる舞台装置でしかない。

涙香は上の英語部分を独立させては翻訳しなかった。

ホレイス・テンブルがヴィオランテの父である。原文の「すべての反対はムダだった all opposition was useless」以下を涙香は少しふくらませて「父の為にはタツター粒の男種、之を危険な兵隊に遣つてはと、親の心で様々に止めたけれど」とした。直訳ではないが原文を踏まえている。

クレイ原作と涙香訳がほぼ重なる部分を示す。

“Good bye, father; I am going out into the world now. I will make a name for myself that you shall be proud of. There is nothing like glory. I may come home a general — who knows — with glory, and honor, and all renown.” p.11

「さようなら、お父さん。今から世界に出て行くよ。お父さんが誇りに感じるくらいに名前を挙げてみせる。これほどの栄光はないですよ。栄誉と名誉と全名声を得た将軍として帰ってくるかもしれないな」

少年の無邪気で意気盛んなせりふは涙香訳では前出のとおりになっている。対応する箇所を「中略」しながら再度示す。

「では阿父さん御無事に」(中略) 一人の妹は有るけれど父の為にはタツター粒の男種、之を危険な兵隊に遣つてはと、親の心で様々に止めたけれど「ナニ今に勲章を下げて帰つて来ますよ」と天を衝くほどの意気で家を出たのは、[ ]兵士の年齢に未だ充[た]ぬ十九の少年、何故か唯だ兵隊に成り度がつて、誰の云ふ事も聴かず、……(後略)

原文の「栄光 glory」「栄誉 glory」「名誉

honor」「名声 renown」と単語を重ねるよりも涙香のように「勲章を下げて帰つて来ますよ」とまとめた方が読者には理解しやすい。

クレイ原作では「兵士以外のものになるつもりがなかった」「生まれながらの兵士なんだ、父さん」というのが彼の変わらぬ返事だった。

「どうせ死ぬんだ」という箇所を涙香は「何故か唯だ兵隊に成り度がつて、誰の云ふ事も聴かず」に書き換えて本文に組み込んだ。涙香が英語原作を自在にあつかって翻訳していることがわかるだろう。直訳ではないがかといって原文からまったく離れているわけではない。原作を基本的にふまえて翻訳しているというわけだ。日本では普通に翻案という。

#### 涙香『野の花』と包天笑『空谷蘭』

涙香はクレイ原作に沿いながら彼独自の工夫をした。物語の順序を入れ替えたのものそのひとつだ。

冒頭に見える涙香の日訳部分にどうしても目が行く。そこを包天笑は漢訳でどう処理したのか。

見れば包天笑は涙香訳を完全に無視した。彼は勝手に自分なりの説明を始める。

常言道国家的専制易除。社会的専制難除。這兩句話。正是感慨不少。要知道到了社会専制牢不可破的時候。政治法律。都要退却無權。漸漸的真理也就磨滅。現在不講別的。就這階級一層。便就坑死了多少好人。所以要說平等兩字。恐怕還要經好幾個劫數。纔能到得万分之一呢。做書的這部書。便穩穩含有這個主意在內。難為他苦口婆心。要喚醒人間的癡迷。看官們不可辜負他這個意思啊。上1頁

国家の専制は除きやすく社会の専制は除きにくいとはよくいわれることだ。このふたつは誠に感慨深い。社会の専制が堅固で破ることができないことを知ったとき政治法

律ではどうしようもない。真理も徐々に消滅する。現在ほかならぬこの階級というものが善人をどれだけ生き埋めにしていることか。ゆえに平等という2字を言うとしても気の遠くなるほどの時間を経過してようやく万分の1を得ることができるのだ。筆者のこの書物はその考えを内にしっかりと含有している。ありがたいことに本書は老婆心からの忠告で社会の迷いを目覚めさせようとしているのだ。読者諸君はこの考えを無にすべきではない。

クレイ『女の過ち』はたしかにイギリスの階級社会が原因で起こる悲劇を主題のひとつにしている。貴族に嫁いだ田舎の弁護士の娘が遭遇する苦難の数々が描かれる。

クレイは大衆恋愛小説家だ。大量に発表した作品には一定の型が存在することもある。貴族に見初められる別階級の女性という筋運びの小説だ。そこからいくつかの物語形式が派生する。生き別れた貴族の娘を探し出し屋敷に迎えるというもの。その際に別人が成りすまして波乱が起きる。複数の類型を組み合わせることもある。推理小説の要素も含む。そのひとつを利用したのがこの『女の過ち』だ。

クレイは当時のイギリス社会の現実を織り込んで小説を創作した。あくまでも恋愛小説の背景であって階級社会を直接的に批判するものではない。物語の最後は大団円が決まりなのだ。

しかし包天笑はクレイの作品を社会専制すなわち階級を批判したものとして提供すると宣言するのだった。辛亥革命直前に新聞連載を終了している。革命に向かう社会的雰囲気と関係しているのかどうかはわからない。

前言に続く漢訳本文は涙香本を要領よくまとめている。

且説英吉利鄉村地方。有個老律師。膝下祇有一男一女。老妻却已物故。那男子今年十

有九歳。生得一表非俗。是個英姿秀挺的少年。他妹子也十七歳了。一家三個人倒也融融洩洩。有家庭之樂。可是那年英国用兵。出征印度。軍国男兒。都有那從軍的志願。那少年年齡体格。也正可以入軍隊的時候。況且少年人血氣方剛。雄心勃發。他想這一番立功異域。由兵卒而士官由士官而大將。封侯拜相。只消幾個升轉。怕不是個世界崇拜的英雄麼。又想着大丈夫為國民流血。也是名譽之事。這是英吉利的少年。都有這個尚武精神。上2頁

さてイギリスの地方に年老いた弁護士がいた。一男一女があるだけで妻はすでに無くなっている。その男子は今年19歳の堂々として非凡で英姿優秀な若者であった。妹は17歳になっている。一家3名は楽しくまことに家庭の幸福というところだった。だがその年イギリスは戦いでインドへ出征した。軍国の男兒は皆それに志願する。あの若者も年齢体格ともに入隊できる時期だった。しかも若者は生まれつき血気盛んにして雄雄しい心がみなぎっている。異境で一番の功績を立てようと考えた。兵卒から士官へ、士官から大將、諸侯、宰相へといくつかを駆け上れば世界が崇拜する英雄になるのではないか。さらに一人前の男が国民のために血を流すのも名譽なことだと思った。それがイギリスの若者全員が持っている尚武の精神だった。

クレイ原作あるいは涙香日訳にも存在しないイギリス人青年の気概までも盛り込んで包天笑の漢訳は独自の展開を見せている。ただし加筆であって誤訳ではない。

#### 涙香と天笑の翻訳、加筆

ヴィオランテ (Violante Temple/陶村澄子/初珠) は階級差のある結婚をした。出産、離別を経て物語の終結部分にさしかかる。

少年ルパート (Rupert Selwyn/瀬水良彦/良彦) はヴィヴィアン卿 (Lord Vivian Selwyn/瀬水冽/蘭蓀・巨籟達) と先妻ヴィオランテの間にできた息子だ。それが病に倒れた。熱を發し徐々に眠りが少なくなり衰弱しつづける。このままだと命が危ない。そこに付き添って献身的に看護するのが学校のリヴァース夫人 (Mrs. Rivers/河田夫人/幽蘭夫人) だった。リヴァース夫人とは死んだと思われている先妻ヴィオランテの変名である。寡婦頭巾 (widow's cap) をかぶり身をやつしているから夫のヴィヴィアン卿すら気づかない (大衆小説だから多少の無理はしかたがない)。医者が最後の手段だと処方したのが「a fresh opiate」(207頁) である。アヘン剤は鎮静作用があるから睡眠剤となる。涙香は「新發明とかの催眠剤」(414頁) と正確に訳している。その薬で眠ることができれば命は助かる。

投薬する予定の真夜中に近づいた。病人とリヴァース夫人しかいないはずの部屋に人の気配がする。カーテンの隙間から白い手がすつと差し伸べられた。

The hand was withdrawn, then it reappeared, holding, this time, a small vial, full of a clear liquid like cool water. That was placed noiselessly on the stand, and the bottle containing the opiate was withdrawn—still without sound. p.218

手は引っ込められると再び現れた。今度は冷たい水のような透明な液体で満たされた小さなガラス瓶を持っていた。それは台のうゑに静かに置かれた。催眠剤が入っている瓶は引っ込められたままだ。コトリとも音がしない。

息子の命はその薬にかかっている。最後の望みが込められた薬瓶だ。それが何者かによって別物にすり替えられた瞬間である。似たような

小瓶に置き換えられたというのが重要だ。入れ替えの理由は薬瓶が消失したことを気づかせないためだ。置き換えたのが薬効のない液体であることを知られてはならない。それが犯人の狙いだった。最終目的は薬を服用させないことだ。子供の死亡に直結している。用意周到に準備されていることを物語る。

涙香はそれを以下のように翻訳した。

彼の手は直に垂幕の背後へ引込んだ、爾して又直に再び出た、今度は眠薬の入[つ]て居る彼の瓶と同じ程の小さい瓶を持つて居る、勿論其中には矢張り綺麗な水が入[つ]て居るのだ、其手の再び引込むと與に今まで有[つ]た大事の瓶は無くなつて了つた、大事の瓶と似寄つたのを持[つ]て来て取替[へ]たのだ。] 426頁

「取替[へ]た」とははっきり説明している。正確な日本語訳だというべきだ。

包天笑はそこを次のように漢訳した (下線筆者)。

那手忽然縮進去了。不到半分鐘的時候。那手又伸出来了。恰恰在那小瓶的背後。一轉瞬間。這一瓶良彦性命最有關係的藥瓶。忽然不見了。下105頁

その手はふっと引っ込められた。だがすぐにもまた伸びてきてちょうどその小瓶のうしろにきた。その一瞬良彦の生命に最も関係するその薬瓶は忽然となくなっていた。

包天笑は涙香訳にもとづきながら1カ所を改変した。薬瓶を「取替[へ]た」と日本語にあるにもかかわらずそれを意識的に漢訳しなかった。薬瓶が消失したことに変更したのである。代替品はそこにはない。ここが重要な伏線だ。

クレイ原作にもどる。小瓶が取り替えられたことに気づいたリヴァース夫人は薬瓶を盗んだ



犯人を追いかけた。本物の薬は犯人の手中にあることがわかっている。追跡しないほうがおかしい。子供と周囲に気づかれないようにふたりは無言で争った。夫人が必死の思いで取り押さえた犯人の正体は何なのか。

“Now,” she cried. “Beatrice Leigh, down there—down on your knees, and thank you God that you have been spared the sin of murder!” p.219

「さあ」と彼女は叫んだ。「ベアトリス・リー、そこにひざまずきなさい。殺人の罪を免れたことを神に感謝しなさい！」

ベアトリス (Beatrice Leigh/青柳品子/青柳柔雲) はリヴァース夫人 (ヴィオランテ) を新婚の当時から苛め抜いた女性だ。リヴァース夫人が事故で死んだ (と思われた) あと昔からの望みどおりにヴィヴィアン卿と結婚し後妻になった。男の子を出産し資産を受け継ぐには先妻の子ルパートが邪魔になる。生かしてはならぬと薬瓶を盗んだというのが真相だ。「殺害の罪を免れた」とはそのたくらみが失敗したことを意味する。リヴァース夫人は息子の命を救う薬瓶を取りもどした。

涙香訳は次のとおり。少しの加筆がある。

爾して夫人は曲者の顔を見た、誰だらう、多分は此者だらうと今まで既に思つては居たが、全く其の者であるけれど驚いた、実に驚かすには居られぬ。]

「貴女が先ア[あ]品子さん」と河田夫人は、思はず叫んだ、全く曲者は品子自身である、是を見ると河田夫人の念頭には今までの熱心の外に燃ゆる許りの腹立しさも加はつた「エ[エ]、貴女は情[け]無い事を成さるサア茲へ膝を折り、神に感謝をお祈り成さい、貴女は人殺しの大罪を逃れましたよ」  
430頁

説明を加えたがクレイ原作の要点をはずしていない。薬瓶を取り返した。これで子供の命は救われる。そういう物語の流れである。

### 包天笑改変の謎

これが包天笑の漢訳になると様相を違えたものになる。幽蘭夫人 (リヴァース夫人) が犯人を追ってこけつまるびつしたあげくに捕まえて薬瓶を取りもどそうとした。そこまでは涙香とほぼ同じだ。ただ活劇的要素を多めに注入している。例として引用するが比較的長い。その場面を2分割して引用する。

拼命抓住。此推彼扯。扭做一团。幽蘭夫人一手又拖住了那人衣服。総知道那人也是个婦人。原来不是死神。也不是别的男人。心上又壮了許多。便放着胆子。和他性命相撲。你們想。兩個女子。脚下能有多大的力量。相争相撲。相持了多時。一個旋轉。那個婦人。先立脚不穩跌倒在地下了。幽蘭夫人拼命拖著他。那人跌下。幽蘭夫人。自然也便牽連而下。伏在那婦人身上。那婦人更着了急。便在地下乱滾乱掙。想要掙起来。幽蘭夫人便乘勢騎住了他。伸手向那人手内搜他的藥瓶。下106-107頁

必死になってつかんだまま互いに押し引きしながらの取っ組み合いになった。幽蘭夫人は片手で曲者の衣服を引きずった。すると曲者が女であることがわかった。死神でもなければ男でもない。だから心理的にも強くなって大胆にも曲者と命をかけて争ったのだ。考えてもみてほしい。ふたりの女性にどれほどの力があるうとも争い続けてもどれだけの時間が持つものか。くると回るとその女は足元が不安定だったから地面に倒れこんでしまった。幽蘭夫人は必死に曲者を引きずっていたからつられてその上に覆いかぶさった。その女はさらに

慌てた。やたらとジタバタしてもがいて起き上がろうとした。幽蘭夫人は曲者に馬乗りになると手を伸ばして曲者の掌中にある薬瓶を探した。

漢語の「那人」には涙香訳の「曲者」を当てた。夫人と曲者が争う場面は涙香訳にもある。ただしこれほど詳細ではない。

上記漢訳にほぼ相当する涙香訳は次のとおり。「河田夫人は曲者を床の上へ、自分の足許へ、尻付けやうとした、此時の品子の様は殆[ん]ど譬へるに物も無い、恥と、恐れと、爾して怒りまで混じて[、]美しい顔が夜叉の相にはなつて居る、……」431頁。

包天笑訳には活劇的描写がかなり増量してほどこされていることがわかる。

幽蘭夫人が犯人に馬乗りになった状態で薬瓶に手を伸ばす。その続きである。

那人至此。已知無可解救。只有舍了這藥瓶。逃走的一法了。正在幽蘭夫人捻住了他的手時。他便用力將幽蘭夫人的手一推。又趁勢將手中的藥瓶一丟。他的意欲丟在遠處。好讓幽蘭夫人去尋。然後自己好乘機逃走。也是他急中生智。不料一丟過去。正丟在廊外石條上。只聽得丁的一聲。幽蘭夫人聽這聲音。知他藥瓶已經丟了。果然舍了那人。立起身來。去尋那藥瓶。那人得此機會。便一溜煙逃走了。幽蘭夫人尋至石條上。只見瓶已破碎了。瓶內的藥水。早已流完了。心中一急。又復跌倒在地上。(計380字) 下107頁

曲者はここに至り逃れるすべがないことを知った。薬瓶を捨てることだけが逃走するための方法だった。幽蘭夫人が手をねじった時、力いっぱい幽蘭夫人の手を押しやると勢いにまかせて掌中の薬瓶をほうり投げた。遠くへ投げれば幽蘭夫人を探しに行かせることができると考えたのだ。そのすき

に逃げてしまおう。とっさの知恵だった。ところがほうり投げると廊下の向こうの細長い石に当たった。ガチャンと音がした。幽蘭夫人はその音を聞いて薬瓶がほうり投げられたことを知った。曲者にかまわず立ち上がるとその薬瓶を探しに行った。曲者はこの機会に乗じて一目散に逃げてしまった。幽蘭夫人は探して石のところに行くと瓶はすでに壊れていた。瓶の中の薬はもはや流れ出てしまっている。気が急いで再び地面に倒れこんだ。

薬瓶が壊れてしまった。これが大きな部分的改変だ。そうになると子供の命を救済することはできなくなる。息子の死が訪れたその瞬間にこの小説は終了する。大衆恋愛小説家であるクレイがそのような悲劇を書くはずもない。ここは薬瓶を取り戻し犯人の正体素顔を暴露する場面なのだ。そのようにクレイ原作はつづられている。包天笑はなぜこのような無理な筋運びに改変したのだろうか。大きな疑問が生じるのは当然だろう。だが何も知らない中国の読者からいえば手に汗握る場面になる。

次の回になるとさらに奇妙な記述が出てくる。

## 第二十七回

看官們。這部書。那做書的正做到幽蘭夫人和那婦人互扭之際。因為一點事兒。攔了一天筆。却教另外一位先生續了。這位先生提起筆來。寫了十幾行。發一個很[狠]。說這一瓶小小的藥水。希什麼罕。借着搶藥人的手。向廊外階石一丟。可憐瓶也碎了。藥水也流盡了。幽蘭夫人想到了如今。我這個希望一毫一絲沒有了。不如和他拼了一命罷。便歛的立起身來。再向前追去。但見黑影一閃。差不多相離有三丈之遙。幽蘭夫人用一個飛燕斜掠勢。撲將過去。那人見後面仍有人追着。心中一慌。要向東。轉望了西。那西首是不通的。三脚兩步。早被幽蘭夫人追

着。此刻的幽蘭夫人。是和他拼命。不是要向他討藥瓶了。下108頁

第27回

読者の皆様へ。本作品につきまして幽蘭夫人とあの婦人がつかみ合う場面を書いておりましたところ筆者に用事ができたため1日だけ筆を置きました。そこで別の人に続けるようにいったのです。その人は筆を取って10数行を書いたのですが何を思ったのか珍しい薬の入った小瓶をそれを奪った犯人の手で回廊の外の踏み石にむけて放り投げたことにしたのです。哀れにも瓶は砕け薬も流れ出てしまった。こうなっては希望はすっかりなくなった。曲者と命がけで戦わなければならないと幽蘭夫人は考えた。突然身を起こすと追いかけた。しかし黒い影は身をかわすやほとんど3丈(約10メートル)も遠くに離れている。幽蘭夫人はツバメが斜めにかすめ飛ぶ勢いで飛びかかっていった。曲者は背後から追いかけてくるのに気づくと慌てて東へ西へ転じてたがそこは袋小路だ。駆けつけた幽蘭夫人に追いつかれた。この時の幽蘭夫人は曲者と争うのだが薬瓶を取り返そうというわけではなかった。

本文中に作者(訳者)自身が出てきて説明することは珍しいことではない。外国ものなら背景の補足的説明をする、それまでの粗筋をまとめる、訳者の感想を勝手に述べる。

しかし執筆(翻訳)経過について細かな内情を明らかにするのはあまり見ない。しかも犯人が薬瓶を放り投げたことにしたのは別人による改変だと説明した。そう弁解しながらそのまま物語を続けていく。ここもよくわからない展開だ。

たしかに涙香訳文とクレイ原作にも書かれていない部分がある。ゆえにその部分を書き換えたのは明白であって否定できない。ただ

奇妙なのは訳者が登場しながら薬瓶が壊れたのは間違いだと修正しないことだ。そればかりか別人の書き換えを認めたくえで執筆を継続する。その後はふたりの女性が無言の争いを再開する。薬瓶破壊のまま話は進行していく。改変したその後は涙香底本どおりに犯人の正体暴露に続く。

幽蘭夫人却見了那個女人的面了。你道是誰。不是那位子爵夫人還有誰呢。幽蘭夫人這時不禁失聲道。嘎、你是柔雲嗎。這時幽蘭夫人任憑什麼好性子。到此也忍耐不住了。便道好好。原來是你。原來是子爵夫人。你今天不是為着良彥的病。也一同跪着在那裏禱告嗎。可知你實在不是個人。犯着殺人的大罪過了。下109頁

幽蘭夫人はその女の顔をみた。さあ誰だと思われるか。あの子爵夫人ではなくてほかの誰だというのだろう。幽蘭夫人はその時思わず声をあげた。「アア、あなたは柔雲ではありませんか」。幽蘭夫人は穏やかな性格であったとはいえこの時はもはや堪忍袋の緒が切れてしまった。「オオ、あなたでしたか。子爵夫人でしたか。良彦の病気のために今日あなたも一緒に祈りをささげただけではありませんか。あなたはまったくの人でなしだ。殺人という大罪を犯したのですよ」

薬瓶が壊れたことを受け継いでいるから息子を救う方法がなくなったままだ。だから「殺人という大罪を犯したのですよ」ということになる。クレイ原作、涙香日訳とは違うセリフになった。

それでは薬瓶はどうなるのか。薬がなければ子供の命は失われる。そこを取り繕う必要がでてくる。

我是誰呢。柔雲說着。幾乎要發狂了。把身體一灑脫。將手向衣袋中亂摸。幽蘭夫人想

他摸什麼。只見他又摸出一個藥水瓶來。要想向前丟時。幸虧柔雲[幽蘭夫人]眼快。只一搶。便搶在手中。因想怎麼有兩個藥水瓶來。轉念一想恍然大悟。他剛纔丟的這個藥水瓶。是個假藥水瓶。這個纔是真的。下112頁

私は誰なのと柔雲は言いながらほとんど気も狂わんばかりになった。身体を引き抜いてポケットの中を引っかきまわす。彼女は何をさぐっているかと幽蘭夫人は思った。すると彼女はまた薬瓶を取り出すと前の方に投げ捨てようとしている。幸いにも柔雲[幽蘭夫人]が目ざとくさっと奪い取るや掌中に収めた。なぜ薬瓶がふたつもあるのかと思ったが瞬時に理解した。彼女がさきほど投げ捨てたあの薬瓶は偽物だ。これこそが本物なのだった。

引用冒頭で柔雲が「我是誰呢 [私は誰なの]」というのには理由がある。柔雲は子爵夫人だ。その彼女に向かって幽蘭夫人が自分は子爵夫人だと告げたからだ。ならば自分は誰かと柔雲は問わざるをえない。わかったのは壊したものと違うもうひとつの薬瓶を柔雲が持っていたことだ。幽蘭夫人は本物の方を取り返した。

文中で「ママ」をつけた柔雲は誤記だろう。瓶を取り戻したのが幽蘭夫人でなければ前後の話が繋がらない。重要な場面で誤記する理由は不明。

以上の修正を施したあと漢訳は涙香訳の本筋にもどった。

### 包天笑の弁明

それにしても奇妙な筋運びにしたものだ。

最初に疑問が出てくる。新聞連載中の文章に他人にまかせた部分があるという。ならば単行本化する際にその部分を削除してもとに戻すのが通常ではないのか。あるいは改変のままに継続するのであれば内部事情を説明する必要もな

い。1911年1月に連載が終了し単行本になったのは1912年1月だ。1年もの時間の余裕があった。その間でも多忙で訂正する暇がなかったというのか。どちらにしても理解するのはむづかしい。

包天笑が連載時の改変について回想している。ほとんど60余年以前の事だ。関係部分のおおよそは次のとおり。

『時報』に連載してふたりの女性が薬瓶を争奪している場面だった。そのとき姪の葬式があった。『空谷蘭』の日本語原本(注:『野の花』)を陳景韓に渡して代筆をたのんだ。初めてのことではない。彼が連載小説を書いていた時に自分も手助けしたことがある。翌日『時報』を見て驚いた。陳景韓は原文を読まずにふたりの女性が争っている時に薬瓶を投げ捨てて壊してしまった。陳景韓はそういう変な性格だった。そこでテコ入れして壊れた薬瓶は偽物で本物は産みの母親の掌中に戻ることにした\*30。

回想のなかで別の日記本『白髮鬼』にも言及している。陳景韓が該作において同じような奇妙きわまる改変をしたことの証言だ。別稿で説明しておいた。

漢訳の特定部分に包天笑がというような書き換えがあることは上で見てきた。その裏事情を回憶している。勝手に筋書きを変えた他人は陳景韓だった。陳景韓は日本語ができた。一見すれば漢訳本文と回憶が合致しているように思われる。陳景韓は日本語原文を読まなかったという。包天笑の連載の直前を見てから判断して勝手に書き換えたことになる。

『時報』に見る包天笑による説明では陳景韓の筆に任せたのは10数行だという。単行本の本文は1行32字だ。実際には計380字ほどのものだから約12行になる。新聞は1回分が24字×21行の504字だ。数字は一致しないがほぼ1回分か。包天笑が「擱了一天筆」と1日のことだと説明していることと一致しないわけではない。

陳景韓が書いたのは薬瓶を投げ割るという場

面であると確認する。小瓶が壊れてしまえば物語は終了する。そうならないようにつつまを合わせる必要がある。そこに苦勞したというのが包天笑の説明だ。

まず事実を押さえる必要がある。くり返す。薬瓶が壊されたところが涙香日記、クレイ原作とは異なる。

瓶の破壊および女性ふたりの闘争場面を増加させている。ただし原作の筋運びは基本的に変わらない。部分的ではあるが大きな改変である。同時に大きな改変であるが大筋は不変だ。ここが微妙なところだ。

別人(陳景韓)がそうしたと新聞本文中で包天笑がわざわざ弁解する必要はあったのか。内情には触れずにそのまま話を継続すればいいだけだ。そこに戻っていく。普通はそうするだろう。本物の薬瓶があることにしたから物語は破綻せずに進行している。なにかわざとらしい。

部分改変についての考え方(仮説)は複数ある。

1 陳景韓が勝手に書き換えた。包天笑は関知していない。

2 包天笑が最初から準備して書いたのだが陳景韓の改変ということにした。

3 陳景韓が包天笑と協議して書き換えた。包天笑は回憶録において上の仮説1を強調した。陳景韓による書き換えの後始末に手間がかかったというのだ。

私が推測する。陳景韓による相談なし独自の改変は虚構ではないのか。そう深く疑う。

改変部分だけを見ても謎は解明できない。その前の部分にひとつの手がかりがある。

簡単なことだ。台の上に置いてあった薬瓶を入れ替えたかどうかが解決の糸口になる。涙香訳(クレイ原作)は瓶を入れ替えた。

第26回の改変部分より約18行前を見てほしい。包天笑はそこでは入れ替えたとは書かずに取り去ったとしている。確かめる。「一転瞬間。這一瓶良彦性命最有關係の薬瓶。忽然不見了

[その一瞬良彦の生命に最も関係のあるその薬瓶は忽然となくなっていた]」下105頁

台の上には何も無い。本物の薬は早くから姿を消していることにご注目いただきたい。代筆をする陳景韓が書き換えたところより以前の個所なのだ。ほぼ新聞掲載1回分前に相当する。これは陳景韓とは関係なく包天笑が涙香日記とは異なる展開を早くから考えていた根拠となる。薬瓶を投げ壊すという行為が包天笑によって以前から準備されていたことを意味する。そのためには薬瓶が消失していなければならない。

涙香訳(クレイ原作)のように瓶を置き換えてしまえば犯人が所持するのは本物の薬になる。だから河田夫人は薬瓶を取り返すことができた。それを投げ捨てるわけにはいかない。

瓶を壊すのは包天笑個人の改変による新展開だと推測する。瓶を投げるためには犯人が本物と偽物のふたつを同時に所持していたことしなければ物語が大団円にむかって進まなくなる。包天笑はそこを以前から深く考えている。

薬瓶が2種類あるのは涙香訳(クレイ原作)と変わらない。原作は偽物に取り換えた。しかし包天笑は台から本物を取り去ることにして独自の工夫をした。その目的は活劇部分を補強強調するためだ。該作品で活劇の要素がある個所を引き伸ばしたのが事実だ。言ってみれば涙香訳(クレイ原作)よりももっと話が盛り上がり緊迫して読者の動悸は激しくなる。その効果をねらって最初から包天笑が意図して用意していたことだと考える。

種明かしは割れた瓶が偽物であったことである。そこを読んで読者はなるほどと納得したのか。包天笑の狙いは当たったのか。読者の感想が見えないのでその点についてははっきりとはわからない。

事前に伏線を張り前後のつつまが合うように構築されていたと考える。陳景韓による唐突な書き換えとするのは偽装であろう。包天笑の書いていることが本当だとは限らない。少なく

とも包天笑と陳景韓は事前に打ち合わせていると考える。上の例でいえば仮説2あるいは仮説3を筆者は支持する。

### 包天笑の執筆姿勢

以上の変更を見れば包天笑の執筆翻訳姿勢がわかる。底本に依拠しながら改変するのは著者の自由であるし個人の裁量に任されていると考えているのだ。

包天笑が漢訳した別作品に例がある。その小説には日本国が躍進する状況を記述する部分があった。包天笑は愛国心を發揮し躊躇することなく日本をイギリスに置き換えた。それができない箇所は日本という単語そのものを削除した\*31。それくらいのことは平気で実行する。日本語作品を底本にしながらか作品中にある日本を排除する矛盾を矛盾だとは感じない。ただし日本を排除するかしないかは作品によって異なる。『空谷蘭』では登場人物の名前に日本風を残したりして不徹底である。

包天笑にしてみれば翻訳している気はもとからではないのか。彼は作家でもある。自分が創作するための材料として日本語翻訳を利用しているだけ。単なる素材のひとつにすぎない。

そう認識していそう。『時報』初出には「笑」とのみ署名する。創作である認識を前面に押し出した。単行本では呉門天笑生訳と「訳」をつけた。しかし「訳」をつけない別の翻訳作品も多い。

読者にとっては包天笑の創作でも翻案でも関係はない。面白い作品であればいいのだ。原作が西洋小説であろうが日本語重訳でもかまわない。どういう材料を使用して成立したのかは関心の外にあるのが普通だろう。翻訳経路を探索して悩むのは後の研究者だけ。

ということで包天笑の漢訳が直訳ではないからといって批判するのは基本的に適切ではない。当時における翻訳の自由がある。清末民初の翻訳界では原文に縛られない、あるいは原文を踏まえた上で任意に改変することもよくあった。それを日本語で翻案(書き換え)という。

別の言い方をすれば後年に出現する直訳至上主義をそれ以前の翻訳に適用することは妥当ではない。現在の基準で過去を裁断するのは避けるべきだ。その時代の必要に応じた漢訳があったというだけの話にすぎない。 罫

附録：『清末民初小説目録』各版に掲載された『空谷蘭』の英文原作。要点のみ。○印の注と彩色は筆者。

○緒方流水1902 パーサ・M・クレイ

○『死美人』広告1917 トマス・ハーディ夫人

○齋藤昌三1933 トマス・ハーディ夫人

○范 煙橋1962 ヘンリー・ウッド夫人

初 版1988● (英) 亨利 荷特 著。注して MRS. THOMAS HARDY “THE MOTHER'S HEART”

○1996柳存仁の指摘あり

第2版1997 有正書局光緒34(1908)を別項目に立てる。MRS. THOMAS HARDY “THE MOTHER'S HEART”。

原作は THOMAS HARDY の後妻 FLORENCE EMILY DUGDALE (1881-1937) よりも先妻 EMMA LAVINIA GIFFORD (1840-1912) の作品である可能性が高い。亨利荷特 (MRS. HENRY WOOD) の著作とするのは誤りではないか(柳存仁)

○リンク1981 トマス・ダファス・ハーディ夫人

○飯塚容1998

第3版 齊魯書社2002 (同上)

第4版2011 (前半は同上。後半は修正増補して次のとおり) 亨利荷特 (MRS. HENRY WOOD) の著作とす

るのは誤り? (董新宇79頁) MRS. HENRY WOOD “EAST LYNNE” (黄雪蕾) MRS HENRY WOOD (ELLEN WOOD) “EAST LYNNE”

第5版2013 (以下を追加)(飯塚容) CHARLOTTE MONICA BRAEME<sup>??</sup> (BERTH<sup>??</sup> M. CLAY) (朱聯保『近現代上海出版業印象記』215頁) 包天笑由日文転訳の英国女作家亨利荷特著的『空谷蘭』

○黄雪蕾2012、2013 クレイ『女の過ち』

第6版2014 原作は CHARLOTTE MARY BRAME (BERTHA M. CLAY) “A WOMAN'S ERROR” (優先権は SATORU SAITO にあると黄雪蕾2012は指摘する)。原作の誤認は次からはじまる。(後略)

○飯塚容2014

第7版2015 (同上。以下を部分的に追加) [艶麗14-76](英) MRS. THOMAS HARDY “THE MOTHER'S HEART” と誤る。/[文文276]宣統二年三月二日至十二月十八、白話長篇、原著者為英国亨利荷特 (MRS. THOMAS HARDY)、包天笑根據黒岩涙香の日記本『野之花』転訳(注:文文の亨利荷特 (MRS. THOMAS HARDY) は MRS.HENRY WOOD の誤り) / [編年④⑤]

第8版2016 (同上。以下を部分的に追加) [飯塚14-106] ELLEN WOOD “EAST LYNNE” [飯塚14-107]シャーロット・ブレン “A WOMAN'S ERROR” [飯塚14-109]上下2冊本[飯塚14-122]原作者名なし、呉門天笑生訳、刊年不記。樽目錄第2版を引用←古すぎる

第9版2017 (同上。以下を部分的に追加) (崔文東) SATORU SAITO 教授日文名が斉藤悟。

第10版2018 (同上。以下を部分的に追加) [韻声89]英国トマス・哈代夫人著。據黒岩涙香の日記本『野之花』転訳

第11版2019 (同上)

第12版2020 (同上)

【注】

1) 主な日本語文献は次のとおり。

[樽本97]樽本照雄「包天笑翻訳原本を探求する」『清末小説から』第45号(1997.4.1)に掲載。のうち『清末翻訳小説論集』清末小説研究会2007.5.1 / [樽本17]『清末翻訳小説論集(増補版)』清末小説研究会2017.1.15 電字版。後者には補記(内容は2013年のもの)あり。

[飯塚98]飯塚容「『空谷蘭』をめぐる——黒岩涙香『野の花』の変容」中央大学文学部『紀要』第170号 1998.3.20

[飯塚14]飯塚容「第四章 黒岩涙香『野の花』の変容——『空谷蘭』をめぐる」『中国の「新劇」と日本——「文明戯」の研究』中央大学出版部2014.8.1。[飯塚98]と基本的にはほぼ同文。順序を入れ替え部分的に増補したもの。

[楊鄒16]楊文瑜、鄒波「『野の花』の種本と黒岩涙香の訳述に関する考察」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第19号 2016.3.31

2) [編年④⑤]陳大康著『中国近代小説編年史』北

京・人民文学出版社2014.1。略称『編年史』

3) [飯塚98-100][飯塚14-109]は「(一九一〇年)一〇月七日(注:新暦旧暦混用)から再開している」と書いている。

4) 樽本照雄「菊池幽芳『乳姉妹』の原作(誤解の系譜1)」『清末小説から』第138号 2020.7.1

5) 緒方流水『青眼白眼』星光社1902.6.2。奥付は緒方維嶽([国会])。[飯塚98-94][飯塚14-104]に言及がある。架蔵は鳴阜書院1902.6.2/1902.8.10再版。表紙と奥付以外の本文は同文。

6) 木村毅、齋藤昌三『西洋文学翻訳年表』岩波書店1933.7.5。岩波講座世界文学

7) 柳田泉「黒岩涙香翻訳小説目録」『書物展望』第49号 1935.7.1

8) 坂本由五郎、小澤明子「黒岩涙香」人見圓吉『近代文学研究叢書 第19巻』昭和女子大学1962.12.20

9) 伊藤秀雄『黒岩涙香その小説のすべて』桃源社1971.10.25。また『(改訂増補)黒岩涙香その小説のすべて』桃源社1979.5.15。さらに「黒岩涙

- 香著訳書総覧」伊藤秀雄、榎原貴教編『黒岩涙香の研究と書誌』ナダ出版センター2001.6.20
- 10) 広告1：縮刷涙香集第七編『縮刷／死美人』扶桑堂1892.4.25/1917.11.15三十三版。広告2：縮刷涙香集第十二編『人外境』明文館1920.12.20縮刷発行/1926.7.15震災後第一版
- 11) [中村S4]中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心として(3・完)」『清末小説研究』第4号1980.12.1
- 12) 郭延礼『中国近代翻訳文学概論』漢口・湖北教育出版社1998.3/修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第二版第三次印刷
- 13) 森川(麦生)登美江訳、中井 政喜訳『二十世紀中国文学図誌』<13>(選訳)名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』23(1)2001。底本は楊義、張中良、中井政喜共著『二十世紀中国文学図誌』上下冊 台北業強出版社1995.1。のうち楊義、張中良、中井政喜共著、森川(麦生)登美江、星野幸代、中井 政喜訳『二十世紀中国文学図誌』学術出版会2009.6.30。注13(93頁)もほぼ同文。
- 14) 沈慶会『包天笑及其小説研究』華東師範大学2006届研究生博士学位論文 2006.4。
- 15) 李艷麗『晚清日語小説訳介研究(1898-1911)』上海社会学院出版社2014.8 国家对外文化交流研究叢書
- 16) 宋韻声『中英翻訳文化交流史』瀋陽・遼寧大学出版社有限責任公司2017.5 中外翻訳文化交流史叢書
- 17) E. Perry Link, Jr(林培瑞)“Mandarin Ducks And Butterflies : POPULAR FICTION IN EARLY TWENTIETH-CENTURY CHINESE CITIES” University of California Press、1981
- 18) 范烟橋「民国旧派小説史略」魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料』(史料部分)上海文藝出版社1962.10/日本大安影印1966.10/香港・生活・讀書・新知三聯書店香港分店影印1980.1/上巻史料部分 上海文藝出版社1984.7(内部発行)。なお范煙橋『中国小説史』蘇州秋葉社1927.12 影印本/香港・華夏出版社1967影印本257頁には包天笑と陳景韓に言及する。294頁に日本語からの漢訳として『空谷蘭』『梅花落』をあげる。ただし原作者、日訳者の詳細は述べていない。
- 19) 魏紹昌『我看鴛鴦蝴蝶派』香港・中華書局有限公司1990.8。また台湾・商務印書館1992.8 新人人文庫4
- 20) 朱聯保編撰『近現代上海出版業印象記』上海・学林出版社1993.2
- 21) 董新宇『看与被看之間——对中国無声電影的文化研究』北京師範大学出版社2000.4 中国影視美学叢書
- 22) [編年]陳大康『中国近代小説編年』上海・華東師範大学出版社2002.12
- 23) 編著温尚南『姑蘇影人』蘇州・古吳軒出版社2012.3。「《空谷蘭》是包天笑涉足影界根拠自己同名訳作編写的第一個電影劇本(這部作品的原作者是英国女作家亨利・荷特,日本作家黒岩涙香將其翻譯改写日本小説《野之花》,而包天笑再從日文小説《野之花》翻譯改編為中文小説《空谷蘭》)」36頁
- 24) 邵棟『紙上銀幕：民初的影戲小説』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2017.8。
- 25) 闕文文『晚清報刊上的翻譯小説』濟南・齊魯書社2013.5。「宣統二年三月二日至十二月十八。“笑”,白話長篇。原著者為英国亨利荷特(MRS. THOMAS HARDY)、包天笑根據黒岩涙香の日訳本《野之花》転訳」276頁
- 26) 次の著作がある。SATORU SAITO, “DETECTIVE FICTION AND THE RISE OF THE JAPANESE NOVEL, 1880-1930” HARVARD UNIVERSITY PRESS, 2012, EAST ASIAN MONOGRAPHS 345。ただし本稿に関連する論文は収録されていない。
- 27) 「参考文献」に掲げた『新編増補 清末民初小説目録』についても「2003マ[2]」「第五マ[三]版」と誤植する。194頁
- 28) 張玉「1920年代の中国における黒岩涙香『野の花』の受容——無声映画『空谷蘭』を中心に」『跨境：日本語文学研究』第6号 2018 高麗大学校日本研究センター。電字版
- 29) [LAW12]GRAHAM LAW, GREGORY DROZDZ, DEBBY MCNALLY, CHARLOTTE M. BRAME



(1836-1884). VICTORIAN FICTION RESEARCH  
GUIDE 36[VERSION 1.1 (MAY 2012)]

- 30) 包天笑『釧影樓回憶録続編』香港・大華出版社  
1973.9。目次と奥付は続篇。「一九四九年日記」  
「後記」を含む。99-100頁。同『釧影樓回憶録』  
北京・中国大百科全書出版社2009.1。「続編」を  
含む。「一九四九年日記」「後記」なし。549-550  
頁。包天笑著、劉幼生点校『釧影樓回憶録 釧影  
樓回憶録続編』太原・山西出版伝媒集団・三晋出  
版社2014.3。「一九四九年日記」「後記」なし。  
406-407頁
- 31) 荒井由美「包天笑「空中戦争未来記」など(下)」  
『清末小説から』第137号 2020.4.1

漢訳『乳姉妹』について

(誤解の系譜 4 完)

樽本照雄



本稿は「誤解の系譜」に連なる最終章である。  
といってもやや微妙だ。

今まで述べてきたようにクレイ『ドラ・ソー  
ン』を基本において幽芳訳『乳姉妹』を論じれ  
ば誤解である。その延長線上に漢訳『乳姉妹』  
を置けば同じだ。ところが『ドラ・ソー  
ン』から切り離せば事情が異なってくる。幽芳訳『乳  
姉妹』はクレイ『ライル卿の娘』が原作だ。日  
訳とその漢訳『乳姉妹』を『ドラ・ソー  
ン』抜きに直接比較対照することは矛盾なく成立する。  
その不可思議なところを指して微妙という。

菊池幽芳訳『乳姉妹』との関係で同名の漢訳  
『乳姉妹』を紹介する。

本稿で扱う書籍は以下のとおり。

日本菊池幽芳著、興化韻琴女士訳『乳姉妹』  
上下冊 18章 上海・中国図書公司和記  
1916.6

[樽本C]表紙は「乳姉妹」、本文と奥付は  
「乳姉妹」、中華民國五年六月初版。上海  
図書館所蔵／菊池幽芳『(家庭小説) 乳姉  
妹』前後編、春陽堂1904(初出は「家庭  
小説乳姉妹」『大阪毎日新聞』1903.8.24-  
12.26(未見))。原作は CHARLOTTE M.  
BRAME(筆名 BERTHA M. CLAY)  
“LORD LISLE'S DAUGHTER.” 1880

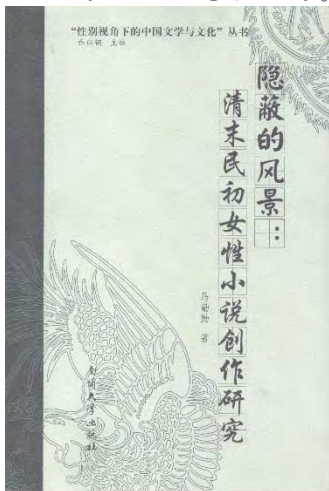
(初出は無署名“LORD LISLE'S DAUGHTER”週刊誌“BOW BELLS”, 1871.6.7-8.2)。幽芳訳の原作は従来から言われていたクレイ“DORATHORNE”1883ではない。

上記書籍について説明する先行文献は多くない。はじめに書いておく。漢訳者の韻琴女士は劉韻琴だと各種の目録論文には普通に記述がある。江蘇興化の出身だから間違いない。これが定説だ。

ところが説明が当然あってもいいと思われる著作に触れられないという不思議が出現している。次のとおり。

### 馬勤勤のばあい

馬勤勤の著作『隠蔽的风景』[勤勤16]には「第四章 休笑女兒無遠志 也會仗劍走天涯——劉韻琴及其愛國啓蒙的反袁小説」がある。劉韻琴について1章を割いている。詳細で専門的だということができるだろう。



劉韻琴肖像

その説明を読んで感心する個所がある。実物で確認したものと未見の作品を厳密に区別している。これはできそうでできないことだ。見ていない書籍を見ていないと書く。立論に相当な自信がなければ普通はしないと思う。それだけ該書に資料的な信頼を置くことが可能だ。

漢訳『乳姉妹』は劉韻琴の手になる。これが従来からの前提かつ認識である。再度提起しておく。

馬勤勤の説明によって劉韻琴の略歴を筆者がまとめる。

劉韻琴は江蘇興化の人(1884前後-1945)、祖父は劉熙載、南京で学び日本に留学、1915年から『中華新報』で記者活動を開始する。反袁世凱の作品を発表したのち1917(又1918)年にマレーシア・マラッカで教育に従事した。

馬勤勤の説明を読んで奇妙なことに気づく。劉韻琴の翻訳だといわれている漢訳『乳姉妹』(1916)について言及がない。日本に留学した経験がある劉韻琴だ。ならば幽芳作品を漢訳していても不思議ではないだろう。しかし馬勤勤の解説は多くの研究者が該漢訳を掲げているのと一致しない。

馬勤勤が漢訳『乳姉妹』を出さないのにはふたつの可能性が考えられる。以下はあくまでも筆者の推測である。

ひとつはうっかりその存在を見逃した。

「主要参考文献」に樽目録第3版(2002)が掲載されている(309頁)。それには漢訳『乳姉妹』を収録する。偶然に見落とすということがあるだろうか。不可解である。

ふたつは意図的に無視した。

劉韻琴ではない筆名の韻琴がいることを馬勤勤は書いている(196頁)。また陳尺山の号が「韻琴」だという(197頁)。言及しないというのは漢訳『乳姉妹』の韻琴は劉韻琴ではないという馬勤勤の認識なのだろうか。

その陳尺山(韻琴)はイギリスに留学したことがある。英語ができた。次の翻訳書があると



南洋馬六甲華僑公立培德女學校校長劉韻琴女士小影(《婦女雜誌》第四卷第五號, 1918年5月)



馬六甲培德女學校校長劉韻琴女士(《婦女雜誌》第六卷第三號, 1920年3月)

いう。

(俄) 巫歴山大杜廬著、莫等閑齋主人訳  
『(写情小説) 奈何天』16章、改良小説社  
光緒34(1908)

[付俄33]表紙奥付写真あり。表紙に上海改良小説社印行、奥付に著作者：改良小説社、発行所：上海・新世界小説社、光緒三十四年正月月中旬出版。説明して陳韻琴、字尺山、可能以英訳本為底本。

英語の原本から漢訳したという付建舟の説明だ。日本語の幽芳『乳姉妹』を翻訳した韻琴は陳尺山である可能性は少ない。

それでも漢訳者の韻琴女士は劉韻琴ではないと馬勤勤は判断するのであろうか。ならばなんらかの説明が必要だと思う。無視をする意味がわからない。

馬勤勤の著作は劉韻琴を詳細に紹介して珍しいものだ。だからこそ漢訳『乳姉妹』がないことに違和感を抱く。表記される韻琴女士の「女士」からして劉韻琴だとすることは矛盾しないだろうと筆者は判断する。

#### 楊文瑜+鄒波の言及

漢訳『乳姉妹』については楊文瑜+鄒波の言及がある。珍しい例だ。日本語で書かれた論文から引用する(注釈番号は省略)

[楊鄒18-429]『ドラ・ソーン』の中国語訳を考察する際、論者は偶然に稀観本『乳姉妹』を発見した。この訳本は1916年に中国図書公司により出版されたものであり、翻訳小説の書誌や目録には記載されていない。潘少瑜は論文の中でこの訳本に言及しているが、詳細な情報は明らかにされていない。作品の著作権ページに「著者 菊池幽芳」と明記されている。翻訳者は「韻琴女士(劉韻琴)」であり、二冊で、全18回ある。

この中国語版『乳姉妹』の翻訳は逐語訳ではなく、原作の情報を十分に汲み入れ、調整しながら訳したものである。しかも、劉韻琴訳からは文学素養が豊かに感じられる。

幽芳『乳姉妹』の原作がクレイ『ドラ・ソーン』だと誤解したままだ。それとは別に漢訳『乳姉妹』があることを発見した。『ドラ・ソーン』さえ言わなければよい。菊池日訳とその漢訳というのはそれだけで十分に成立する。

文中にある潘少瑜の論文というのは[少瑜12-260]だ。そこには「以及劉韻琴(1884-1945)将菊池幽芳<乳姉妹>中訳的<乳姉妹>(1916)」と記述される。楊鄒の書くように発行年だけで出版社も示してはいない。

楊鄒は「翻訳小説の書誌や目録には記載されていない」と述べている。何を調べたのか不明だ。まさか馬勤勤の著作に漢訳『乳姉妹』が出てこないことだけによっているわけではなからう。

ここは記載がある目録などを見るべきだった。記載がないというのは勘違いである。2018年の論文になぜこのようなことを書いているのかわけがわからない。だいたい以前から該書の存在は以下の目録、書籍に明記されている(略号については樽目録を見てほしい)。

樽本照雄編『新編清末民初小説目録[第2版]』清末小説研究会1997.10.10(現在は第12版2020)

[民外0104]「乳姉妹」(上、下冊)、韻琴訳、上海・中国図書公司和記、1916年6月初版

[現代917]「乳姉妹」、韻琴訳、上海中国図書公司、1916年6月初版。

[大典421]は上海中国図書公司刊とする

[小凌05]該小説中訳本于1916年6月由上海中国図書公司和記出版、菊池幽芳<家庭小説乳姉妹>上下冊。韻琴訳。

(郭延礼) 劉韻琴[郭16-103]劉韻琴訳<乳姉妹>[郭16-152]劉韻琴的<乳姉妹>(日本菊池幽芳著、中国図書公司和記1916年6月出版)[郭16-388]貝莎・

克萊原著、劉韻琴訳《乳姉妹》(據菊持<sup>ママ</sup>[池]幽芳  
日本文転訳)、上海:中国図書公司和1916年初版  
[劉民713]「乳姉妹」上下冊、韻琴訳、上海・中国図書  
公司和記、1916年6月。  
[漢訳2296]「乳姉妹」二冊、韻琴訳、<sup>ママ</sup>上海図書公司和  
記、1916年  
[艶麗14-148頁]劉韻琴訳「乳姉妹」  
(朱静66)“家庭小説”「《乳姉妹》是“家庭小説”等」  
訳者、書誌なし。(朱静67)「但有些是從日文訳本  
転訳的、如《無人島大王》、《乳姉妹》等」  
[麗萍63]韻琴訳「乳姉妹」、小説、上海中国図書公司  
1916年6月初版  
[翻目15-25]原作なし、日訳なし  
[東元17-129]韻琴訳「乳姉妹」上海中国図書公司1916

楊鄒は漢訳『乳姉妹』について「稀觀本」と  
書くだけで筆を止めれば問題はなかった。それを  
「翻訳小説の書誌や目録には記載されていない」と  
つけ加えた。だからそうではないと言う  
ことになる。上に示したくらい多量に言及がある。

漢訳『乳姉妹』の存在は以前から知られている。  
以上の目録などにあるのが証拠だ。ただし  
目録に掲載されているからといって詳細な説明  
があるわけでもない。だいいち目録作成者が実  
物で確認したかどうかは不確定だ。先行目録を  
複写しただけかもしれない。だから実物を手に  
して本文を検討した楊鄒の論文は珍しい部類に  
なる。

楊鄒が実物を見たことがわかる。たしかに貴重だ。  
所蔵はたぶん上海図書館だろうがそこま  
では書いていない。独自に別の場所から入手し  
たのなら申し訳ない。「韻琴女士(劉韻琴)」と  
説明している個所に注目しておく。定説どおり  
だ。小さなところだが楊鄒の記述は出版社を  
「中国図書公司」として「和記」が抜けている。

漢訳『乳姉妹』についての説明は上記論文に  
おいて詳しいというわけにはいかない。たとえ  
ば「原作の情報を十分に汲み入れ、調整しなが  
ら訳したものである」というのみ。

漢訳を具体的に示して比較的詳しいのは同年  
に発表された鄒波の単独論文(これも日本語)  
だ。

上で「稀觀本」という前後個所はまったく同  
文をくり返す。先の楊鄒連名論文にあるその部  
分はもともと鄒波が執筆したものらしい。

劉韻琴の略歴について興味深い個所があるの  
で引用する。

[鄒18-32、33]翻訳者の韻琴女士こと劉韻琴  
(1883-1945)は江蘇省興化の出身であり、  
1912年から1915年まで日本中央大学に留  
学した。帰国後、上海の『中国新報』に就  
職し、中国で初の女流記者となった。劉韻  
琴は英語も堪能であり、畢倚虹とアメリカ  
の小説『ニューヨークの夫人』を共訳した  
こともある。しかも、口語体の小説を創作  
した小説家でもあった。

前述馬勤勤の説明と異なる部分がある。どち  
らが正しいのか今判断する資料を持たない。

劉韻琴が畢倚虹と共訳した小説については不  
詳。畢倚虹(1892-1926)と張碧梧が共訳した  
作品はある。しかし民国初期に限れば劉韻琴+  
畢倚虹の共訳作は見つからない。ご教示いた  
できるとうれしい。

鄒波は幽芳原作と劉韻琴漢訳を一部引用して  
比較対照している。実物を見ているからそれが  
できる。以前には言及されない個所だから新し  
い。意見部分だけを紹介する。

[鄒18-33]この訳本には「訳述」と記されて  
いるが、比較的菊池幽芳の原作に忠実であ  
る。

[鄒18-34]引用文を比較して読めば明らかで  
あるが、劉韻琴の翻訳は逐語訳ではなく、  
原作の情報を十分に汲み入れ、調整しなが  
ら訳したものである。しかも、劉韻琴訳か  
らは文学的な素養が豊かに感じられる。

『残月』の歌は楚辞の形を取っており、古雅に満ちた文体である。地の文は『紅樓夢』などの古典小説を想起させるほど柔軟で端正な表現で綴られている。

筆者がまとめる。漢訳は幽芳の原作に忠実ではあるが逐語訳ではないとなる。

日本に留学したことのある劉韻琴が幽芳訳『乳姉妹』を漢訳した。鄒波の説明によっても十分に可能性のあることだと理解できる。

楊鄒の主張はその論文名に表われている。クレイ『ドラ・ソーン』が日本から中国へ伝播していったということで固まっているのだ。幽芳訳『乳姉妹』をクレイ『ドラ・ソーン』と比較対照することは間違っている。ところが『ドラ・ソーン』に結び付けなければよいだけだ。幽芳訳『乳姉妹』とその漢訳『乳姉妹』だから両者を見比べて論じることは可能である。そこが不思議なところだとくり返す。

### 漢訳『乳姉妹』について

いままでやってきたように冒頭部分と中間の一部分を比較対照する(幽芳訳文のルビは省略)。おおよその漢訳傾向を知るためだけだ。

或夏の午後五時過、播州飾磨の里に導く田舎道を、二人乗りの俵に揺られて来る品のよい若い婦人がありました。年のころはやつと二十二三位、高等な丸髷に藤色の手柄をかけ、越前上布の紺飛白を着て居るのが、その白い肌に移り合つて、際立つて器量を善く見せて居ます。1頁

一日薄暮的時候。播州飾磨里田舎道中。忽来了一乗可坐二人之人力車。車中載着一年約二十二歲的少婦。那少婦容儀靜婉。衣飾麗都。1頁

ある日の夕方時、播州飾磨の里の田舎道を二人乗りの人力車が突然やってきた。車に乗っているのはほぼ二十三歳の若い婦人

だった。その婦人の姿態度は物静かでやさしく衣服は華麗だ。

劉韻琴の漢訳は幽芳訳文にもとづいている。ただし日本の髪型衣装(丸髷まるまげ、紺飛白こんがすり)をそのまま漢訳しても読者には通じないと考えたものか省略した。なじみの四字熟語に置き換えたのは漢訳者の工夫のひとつだ。細かな削除が漢訳を引き締める。

次は昔の恋人高浜勇が君江に向かって他人に成りすました証拠写真を突きつける場面だ。

この写真はいふまでもなく房江の幼顔の写真で、善く見ると、今の房江の顔の特質は、なほこの幼顔の中にも認める事が出来るのです。併し一寸見たばかりでは、すぐそれを房江の幼顔と気のつくほど似て居るものではありませんけれども、君江はそれを一目見ると、すぐに房江の写真だと感じたのでありました。

(勇) 誰の写真か分かりましたか。裏を見せてあげませう。170頁

写真の裏面には――

「君子(明治十一年…月…日生) / 年月 日 君子の母より / お浜どのへ」と美しい女文字で認めてありました。171頁

君江看那像片上。是個三歲許的的小女孩兒。笑嬉嬉的站着。小鼻子傍子。有一点黒子。一望即知道是房江小時的像。高浜勇問道。你說他是誰。你再看這背面。說着翻了過來。君江見上面有女的人的字跡写道。

「君子(明治 年 月 日生) / 田川嬪娘惠存 / 年月 真野君江寄」65-66頁

君江がその写真を見てみると三歳ばかりの少女が嬉しそうに立っている。小鼻のところに黒子がある。ちょっと見れば房江が小さい時のものだとわかった。高浜勇が問う。

それは誰ですか。裏をご覧なさい。と言  
いながら裏返した。そこには女性の文字で  
次のように書いてあるのが君江に見えた。  
「君子(明治 年 月 日生) /  
田川嬪娘どのへ。 年 月 真野君江より」

「嬪娘」は乳母の名前を漢訳したもの。幽芳  
訳では「お浜」となっている。漢訳は直訳では  
ない。ただし基本的に登場人物、明治年号まで  
そのままに写しているといえる。

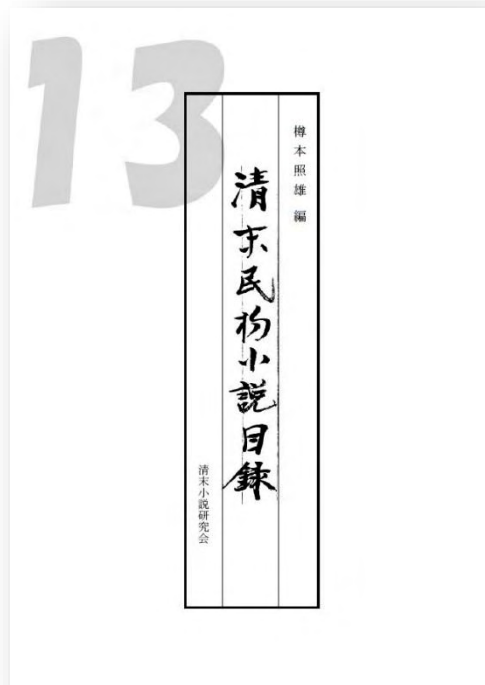
下冊87頁に君江の昭信あて遺書が漢訳される。  
ここも逐次訳ではない。大意を述べるだけ。し  
かも房江あての遺書は省略した。「與房江書。  
叙冒替始末。文太冗長。不訳」と日本語原文が  
あまりにも冗長だという。読者の意向を考えず  
に訳者の判断で切り捨てた。劉韻琴の翻訳姿勢  
が表れているというべきだ。 罍

【参考文献】

- ほぼ発表年順／(同一著者のばあいはまとめた。  
引用していない文献もある)
- [小凌05]姜小凌「明治与晚清小説転訳中の文化反思—  
—從《新聞売子》(菊池幽芳)到《電術奇談》  
(吳趸人)」『文化研究』第5輯 2005.5
- [朱静07]朱静「清末民初外国文学翻訳の女訳者研究」  
北京大学『国外文学』2007年第3期(総107期)  
2007.8.25
- [少瑜12]潘少瑜「維多利亞《紅樓夢》:晚清翻譯小説  
《紅淚影》の文学系譜与文化訳写」『台大中文学  
報』第39期 2012.12 電字版
- [郭16-117]郭延礼、郭蓁『中国女性文学研究(1900-  
1919)』済南・山東教育出版社2016.7。劉韻琴  
について注から引用する。「⑦劉韻琴(1883-  
1945), 江蘇興化人, 系近代著名文学批評家劉  
熙載の孫女, 民初著名的新聞記者, 曾遊学日本,  
有翻譯, 亦有創作, 著有《韻琴雜著》, 有政論、  
詩詞和小説」
- [勤勤16]馬勤勤『隱蔽的風景:清末民初女性小説創作  
研究』天津・南開大学出版社2016.10 “性別

視角下的中国文学与文化”叢書

- [楊鄒18]楊文瑜、鄒波「中国における『ドラ・ソーン』  
の受容——演劇・メディアを中心に」『東アジア  
日本語教育・日本文化研究』第21輯、福岡:東ア  
ジア日本語教育・日本文化研究学会 2018.3.31
- [鄒18]鄒波「東アジアにおける『ドラ・ソーン』の翻  
訳と翻案——小説の翻訳を中心に」香港日本語  
研究会『日本学刊』第21号 2018.8 電字版



陀思妥耶夫斯基小說漢譯佚忘四種

古二德

(CÉSAR GUARDE-PAZ)

俄國文學漢譯，雖自清末時期而始，並且其成熟亦必歸功於林紓自1914年至1924年所譯的托爾斯泰短篇小說，然該譯之所以能蓬勃興盛，乃係因為五四運動改革者認為俄蘇文壇及其社會關切能夠體現中國新文學的“導師和朋友”。\*1對應此背景下，俄國文豪陀思妥耶夫斯基思想及著作不僅早受到高度重視，而且對五四運動的文學主題亦發揮特殊影響，例如他們所主張的“為人生”的文學、違背保守派的“閒書”及照顧“被損害者與被侮辱者”\*2——此題皆能追溯到陀氏小說或者研究陀氏思想的外國學者。

最早陀氏漢譯為〈賊〉短篇小說（俄語：〈Честный вор〉；漢語：〈誠實的小偷〉），喬辛煥譯，刊於1920年5月26至29日上海《民國日報》副刊《覺悟》第1551至1554期，\*3並於短短兩周內陀氏〈冷眼〉短篇小說（俄語：〈Ёлка и свадьба〉；漢語：〈聖誕樹和婚禮〉）由惲鐵樵翻譯，刊於1920年6月10日《東方雜誌》第17卷第11號。該譯不但最早，亦成為民國時期重譯最多的陀氏著作，不過陀氏長篇小說，雖然眾所周知，\*4亦許久尚未譯過。

陀氏《罪與罰》、《死人之屋》長篇小說漢譯是否由鄭振鐸先譯？

筆者正在研究民初時期對陀思妥耶夫斯基的

接受程度時，偶然遇到四本陀氏長篇小說漢譯的信息。該譯仿佛曩昔寂寂無名，故如此報導，希望未來學者能繼續研究該譯的所在或者痕跡。

1920年8月16日上海《時事新報》經常所貼的“共學社”出書預告忽然開始包括“死人之屋（道司托也夫司基）”一書，鄭振鐸“在編譯中”（頁2），並8月27日已經成為出版（頁2）。該譯預告持續到1921年1月7日而止，同年自8月16日至9月22日即以“死人之家 杜思退益夫斯基著 鄭振鐸譯”為新書名重續宣傳（頁14），刊登於“俄國文學叢書 共學社出版 商務印書館發行”（插圖一、二）。

插圖一：1920年8月27日上海《時事新報》第4544號，頁2。

插圖二：1921年8月16日上海《時事新報》第4890號頁14。

**文學研究會叢書出版預告**

文學的近代研究……虞爾頓著 鄭振鐸譯	文學的原理與問題……亨德著 沈譯民譯	文藝思潮論……厨川白村著 謝六逸譯	文學概論……黑特生著 羅世英譯	文學批評原理……文齊斯德著 鄭振鐸譯	文學之社會的批評……清克著 李石岑沈雁冰譯 柯一岑鄭振鐸譯	詩歌論……反利士著 傅東華譯 金兆梓譯	戲劇發達史……布蘭特馬太著 王統照譯	近代戲劇……列費森著 李之當譯	日本文學史……周作人編
夜店(戲劇)……耿濟之譯	高爾基短篇小說集……孫伏園譯 鄭振鐸譯	七個統死者(小說)…… 俄國安得列夫著 沈譯民譯	人的一ance(戲劇)……俄國安得列夫著 鄭振鐸譯	大時代中小人物的懺悔…… 俄國安得列夫著 耿濟之譯	安得列夫短篇小說集……會員譯 克洛連科短篇小說集……會員譯 古卜林短篇小說集……會員譯	罪與罰(小說)……俄國屠格涅夫著 耿濟之譯	罪與罰(小說)…… 俄國杜思退監夫斯基著 鄭振鐸譯	家庭幸福(小說)……俄國陀爾斯泰著 耿濟之譯	

插圖三：1921年5月28日上海《時事新報》第4809號，頁14。

尤其竟然即1921年5月28日上海《時事新報》又有〈文學研究會叢書出版〉預告，其中可見“罪與罰(小說) 俄杜思退監夫斯基著 鄭振鐸譯”一書(頁14，請參插圖三)。說來也怪，若鄭振鐸信然著手翻譯或者順利出版陀氏小說漢譯，特指《罪與罰》長篇小說，豈非應該亦通過商務印書館及共學社所印的漢譯封三、四宣傳？筆者所檢察的共學社漢譯毫無任何關於《罪與罰》、《死人之屋》、《死人之家》的廣告。同時，耿濟之1940年代所譯的《死屋手記》中、鄭振鐸所替耿濟之許多漢譯書寫〈序〉中，<sup>85</sup>皆無提及與討論共學社的該兩漢譯——緣由何在？

若觀看預告上的刊物，其中有許多出版過而尚存之專著及漢譯，例如《歐洲文藝復興史》，《國際聯盟及其趨勢》，《社會心理學》，《歐戰史要》，《分配論》，《物質與記憶》，《藝術論》，《進化與人生》，《父與子》，《前夜》，《甲必丹之女》，《托爾斯泰短篇小說集》，《柴霍甫短篇小說集》，《俄國戲曲集》(包括〈巡按〉，〈雷雨〉，〈田村之月〉，〈黑暗之勢力〉，〈教育之果〉，〈海鷗〉，〈伊文諾夫〉(改為〈伊凡諾夫〉)，〈櫻桃

園)，〈萬尼亞叔夫〉(改為〈萬尼亞叔父〉)，〈六月〉)及《獵人日記》。再者，許多書名因通過出版變況而改名，例如《詩歌論》改為《詩之研究》<sup>86</sup>，《人的一ance》改為《人之一生》，《大時代中小人物的懺悔》改為《小人物的懺悔》，《物質記憶》改為《物質與記憶》等。但鄭振鐸陀氏兩譯皆無跡可尋。筆者認為，關於該兩譯的命運或下落，有以下可能性：

- (1) 佚失不存：恰如預告中之《現代思潮之淵源》、《蘇維埃制度論》、《甚麼是善》、《人及超人》、《夢》、《死靈》、《三日》(或《三天》)等。
- (2) 誤解命名：鄭振鐸陀氏兩譯也許原來為耿濟之的《罪與罰》、《死屋手記》，前者1932年因戰而佚，後者1947年作者死後由開明書店出版，鄭振鐸也許祇預題〈序〉。預告上亦有兩本如此：《復活》，瞿秋白譯(插圖一)，但共學社1922年所刊登漢譯由耿濟之翻譯；有可能，因1921年首先出版的《托爾斯泰短篇小說集》由瞿秋白、耿濟之兩人合譯而錯誤地得名。尚有《人之一生》，預告上由鄭振鐸譯，原來由耿濟之譯，鄭振鐸題〈序〉。
- (3) 譯而無刊：例如預告上郭開貞(即郭沫若)所譯之《浮士德》“全譯上下兩部”(插圖一)，根據作者於1928年11月30日為創造社出版社所寫的〈譯後〉，雖1920年已經翻譯過該書，然共學社無出版過兩本全譯：民國八年的秋間，我曾經把這第一部開場的獨白翻譯了出來，在那年的時事新報雙十節增刊上發表過。翌年春間又曾經把第二部開場的一齣翻譯了出來，也是在時事新報的學登上發表過的。就在那民國九年的暑假，我得着共學社的勸誘，便起了翻譯全部的野心，費了將近兩個月的工夫也公然把這第一部完全翻譯了。



……

我早就決定把這第一部單獨地發表，不料我寫信給共學社的時候，竟沒有得着回信，我便只好把這譯稿擱置了起來。一擱置竟擱置了十年之久。<sup>\*7</sup>

深思熟慮後，非足夠證據得出結論，故該譯命運或下落尚莫衷一是。吾亦不再參加討論。

### 陀氏《卡拉馬卓兄弟》、《死人家》長篇小說漢譯未刊兩種

最後，筆者希望讀者注意1930年代的兩種漢譯，幾乎毫無疑問未成功出版。該譯僅出現於翻譯家桐華（生年不詳，卒於1944年）1930年刊登的〈關於朶斯托也夫斯基的印象斷片〉一篇中，如下：

惟有我們不幸的朶斯妥夫斯基，却除了五六年前韋叢蕪君的譯窮人一本，和直到今夏才『難產』出了的半部罪與罰之外，那無價豐富的藝術寶藏就沒有人問（不錯，順便想起來了，還有一本不知那位譯的主婦，在此添上。）；雖然在作者的事跡方面却已有了李偉森君和韋叢蕪君的朶斯托也斯基夫人厚厚的回憶雜記。「此外，我們就再也沒有了。（但也許有正在『坑茲坑茲』地幹着的譯者和譯者們，如梁遇春君的卡拉馬卓夫兄弟，趙君的死人家等等。）<sup>\*8</sup>

其中所提的陀氏漢譯如下：《窮人》，韋叢蕪（1905-1978）譯，由未名社1926年出版；〈罪與罰〉，韋叢蕪譯，先刊於《華北日報副刊》自1929年12月26日至1930年2月16日，1930年6月由未名社“『難產』出了的半部”；《主婦》，白萊（身份不明）譯，1927年4月由光華書局出版，1935年改名為《房東太太》，由大光書局再出版；《朶思退夫斯基—朶思退夫斯基夫人之日記及回想錄》，李偉森譯，1928年由北新書局出版；《回憶陀思妥夫斯基》，韋叢蕪譯，

1930年由現代書局出版。除該譯之外，上述此段亦齒及之前忽略的兩種漢譯，《卡拉馬卓夫兄弟》，梁遇春譯，及《死人家》，趙君譯。

梁遇春（1906-1932），筆名秋心，福建閩侯人，1928年畢業於北京大學英文系，散文作家，主要翻譯英國作品，其中包括丹尼爾·笛福（Daniel Defoe）、約瑟夫·康拉德（Joseph Conrad）、喬治·吉辛（George Gissing）、約翰·高爾斯華綏（John Galsworthy）、伯特蘭·羅素（Bertrand Russell）等。1931年由北新書局出版《紅花》俄國短篇小說，梁遇春譯，迦爾洵（Vsevolod Mikhailovich Garshin）原著，原題為《Красный цветок》（1883年出版）。迦爾洵故事具有博愛及憐憫的精神，與陀氏小說相同，梁遇春決定翻譯陀氏《卡拉馬卓夫兄弟》長篇小說，不足為奇。基於先前翻譯及譯者學業，筆者估計該譯皆依靠英語版。《卡拉馬卓夫兄弟》一書又長又深，可能因作者1932年染急性猩紅熱猝然逝世而未完成翻譯。若然翻譯手稿仍保存。

趙君，身份不明。當時姓趙的翻譯者不少，例如趙宗預、趙餘勳、趙家璧（1908-1997）、趙景深（1902-1985）等。趙家璧雖翻譯過《蘇聯版畫集》，蘇聯藝人法弗爾斯基（Vladimir Favorsky）原著（晨光出版社，上海，1949），其他翻譯中卻無俄蘇小說家。趙景深，筆名鄒嘯，作家、譯者及出版家，1930年任北新書局總編輯，其小說翻譯包卻無限於契訶夫（至少九種）、屠格涅夫（一種）。再者，桐華刊於《南開大學週刊》的論文，之所以祇提譯者之姓的原因，必定係因為此刊讀者應該熟悉其譯者。趙景深自1919年至1923年居於天津，先入南開中學就讀，因貧而辭，後到天津棉業專門學校紡織科續學而畢業。1923年初趙景深成立短暫的天津文學團體“綠波社”，全體文學家均參加南開大學該年開辦的暑期學校。其中，趙景深因善譯而得獎，由此聲譽大振。南開週刊讀者毋庸置疑地熟悉此譯者的名聲。

雖該四種翻譯之存在並無實質性地更改我們

對陀氏接受程度歷史的理解，然由該譯可見早期譯者已設想翻譯陀氏最有引人注目的長篇小説，並且陀氏偉大作品盡人皆知<sup>9)</sup>、以英譯而閱，因由於自北京基督教青年會圖書館、商務印書館東方圖書館可獲。

四

【注】

- 1) 魯迅，〈祝中俄文學之交〉，《文學月報》第1卷第5至6號，1932年，頁2。
- 2) 魯迅，〈《豎琴》前記〉，《豎琴》，良友圖書印刷，上海，1933，頁1至2；沈雁冰（以郎損為筆名），〈陀思妥以夫斯基在俄國文學史的地位〉，《小說月報》第13卷第1號，1922年1月，頁21。上年10月由沈雁冰主編《小說月報》之「被損害民族的文學」專號，收有波蘭、捷克、塞爾維亞、芬蘭等文學翻譯。
- 3) 由王聖思首先發現，對此請參考〈陀思妥耶夫斯基與中國〉，載智量編，《俄國文學與中國》，華東師範大學，上海，1991，頁126；樽本照雄編，《清末民初小説目錄》，清末小説研究会，2020，第12版，Z0113。期刊名稱要訂正為《民國日報》。
- 4) 請參考鄭振鐸，〈記瞿秋白同志早年的二三事〉，《新觀察》第12期，1955年6月16日，頁26至28。
- 5) 耿濟之《罪與罰》原譯手稿因1932年1月28日日本海軍陸戰隊襲擊上海開北而遺失，所以鄭振鐸若題〈序〉已失傳。關於鄭振鐸同耿濟之之友情及其〈序〉，請參鄭源，〈推薦序〉，收入《罪與罰》，耿濟之原譯，陳逸重譯，遠景出版社，臺北，2012，頁6。該書為2009年耿濟之外孫陳逸於臺灣國家圖書館所查找之佚稿，三年後出版。其實該譯即1936年由上海啓明書局所出版的汪炳琨漢譯（參賴慈芸，〈耿濟之在大陸失傳的《罪與罰》在台彎重現？一空歡喜一場〉，收入《翻譯偵探事務所：偽譯解密！台灣戒嚴時期翻譯怪象大公開》，蔚藍文化出版，臺北，2017（筆者祇參閱電子版，頁碼不清）。至於耿濟之《死屋手記》，1947年初版亦缺乏序跋。
- 6) 請參陳荒煤主編，《文學研究會資料（下）》，河南人民出版社，1985，頁1373。
- 7) 郭沫若，〈譯後〉，收入歌德原著，《浮士德》，郭沫若譯，創造社出版社，上海，1928年，頁1至2。

- 8) 桐華，〈關於朶斯托也夫斯基的印象斷片〉，《南開大學週刊》，第99期，1930年，頁53至54。
- 9) 例見蹇先艾，〈貴州紀行（七）〉，《華北日報副刊》第162期，1929年6月17日，頁8：“上午在龍崗打早間。今天坐滑竿把周身都坐痛了；唉！囚籠似的轎子生活！只好在皮包內取了一本陀思妥以夫斯基的 A House of the Dead 來看，混了好幾小時”。

清末小説から

- 文 娟○試論吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角 『明清小説研究』2018年第4期（總第130期）2018.10.15
- 謝 天振○中国翻譯文學史：實踐與理論 『中国比較文學』1998年第2期 1998.5.15
- ○陸建德論林詠“二三流者”作品的非凡意義 『東方翻譯』2018年第6期 2018.12.15 未見
- ○百年五四與今天的重写翻譯史：對重写翻譯史的幾點思考 『外國語（上海外國語大學學報）』2019年第4期 2019.7.20
- 張 鉄夫○普希金“初臨中土”的向導——駁翼翬與普希金 『湘潭大學社會科學學報』2000年第5期 2000.10.30 未見
- 陳 平原○左圖右史與西學東漸 『書城』2008年8月号 2008.8.5
- 范 伯群○原原本本（二題） 『書城』2008年8月号 2008.8.5
- 陳 宏淑○訳者の操縦：從 Cuore 到《馨兒就學記》 台湾『編訳論叢』第3卷第1期 2010.3
- 靳 文鑫○【書評】日本學者追溯底本，著書澄清

“林紵冤案” 『中国出帆伝媒商報』  
2019. 3. 26

稲岡 勝○『明治出版史上の金港堂——社史のない  
出版社「史」の試み』皓星社2019. 3. 29

黄 麗珍○『清末民初小説の学生群体接受研究』濟  
南・齊魯書社2019. 10

付建舟+胡全章○『文学的双重变革——清末民初文  
学史』杭州・浙江工商大学出版社2020. 1  
中国新文学發展史研究叢書

付建舟等○『《小説新報》与中国文学的内源性变革』  
北京・中国社会科学出版社2020. 10

廖 七一○『20世紀中国翻訳批評話語研究』北京大  
学出版社2020. 6

王 軍平○『規範、慣習与訳者抉擇——晚清(1895-  
1911) 翻訳規範及訳者行為研究』北京・中  
国社会科学出版社2020. 9

宋 雪偉○晚清科幻小説の時代特徴与文化反思『明  
清小説研究』2020年第4期(総第138期)  
2020. 10. 15

梁 蒼泱○清末時新小説徵文作者群的考証与印証  
『明清小説研究』2020年第4期(総第138期)  
2020. 10. 15

余 夏雲○近代情動：《恨海》与破碎的自我轉向  
『中国現代文学研究叢刊』2020年第10期  
(総第255期) 2020. 10. 15

呂 輝菲○曼陀『滑稽小説 女学生旅行記』におけ  
る女学生描写——明治日本の『滑稽女学生  
旅行』との比較を中心に 『野草』第105  
号 2020. 10. 30

田雁著、小野寺史郎・古谷創訳、中村元哉解説○  
『近代中国の日本書翻訳出版史』東京大学  
出版会2020. 12. 9

張鉄夫『群星燦爛的文学——俄羅斯文学論集』

北京・東方出版社2002. 11

托爾斯泰三大長篇的对照藝術

20世紀上半葉普希金在中国的接受

普希金“初臨中土”的向導——戩翼翬与普希金

馬泰来『采銅於山——馬泰来文史論集』

北京・国家図書館出版社2017. 3

《清実録》中的劉鶚

《無專鼎銘》和劉鶚

林訳閑談

林訳提要二十則

林紵訳書序文鈞沈

林紵訳作品原著補考

林訳遺稿及《林紵訳小説未刊九種》評介

張冠李戴的林訳托爾斯泰作品和訳壇幸運児《泰西三  
十軼事》

無中生有的最早林訳《葛利仏葛》

羅香林教授和我的林紵訳研究

范軍主編『中国近現代出版企業制度研究』

北京・中国伝媒大学出版社2020. 5

試論中国出版企業制度的近代化轉型 ……范軍

20世紀二三十年代新聞出版企業的會計改革

……范軍+沈東山

試論上海商務印書館的科学化管理制度

……范軍+何国梅

試論晚清民国時期商務印書館的編輯制度

……范軍+欧陽敏

論民国時期中華書局的產權制度 ……欧陽敏

上海中華書局法人治理結構述略 ……欧陽敏

民国時期中華書局的企業管理制度 ……欧陽敏

論近現代傑出出版人的企業家精神

……范軍+欧陽敏

中国近代出版大家夏瑞芳的企業家精神

……范軍+欧陽敏

夏瑞芳：中国近現代出版企業第一人 ……范軍

中国近現代出版制度史料経眼録 ……范軍

『中国出版史研究』2020年第4期(総第22期)

2020. 10. 20

“中国近代出版史科学”理論構建芻議 ……許静波

晚清新聞画報の出版内容新探——以《点石齋画報》

中的“異士”為例 ……王佳恋+張佩

高鳳池日記の出版史料價值

……葉新